

第七號

文明之母第七號目次

本社の事業を賛成し寄稿と約諾せられたる諸君は左の如し

小川三之助君
岡本武雄君
大矢透君
渡邊修二郎君
田中登作君
中村秋香君
中川重麗君
内田周平君
山縣悌三郎君
佐々木弘綱君
三刀谷扶綱君
島地默雷君
志賀重昂君
關場不二彦君

（姓名以呂波順）



文明之母第七號　明治二十二年五月十五日發兌

文明之母

スペンサー氏女權說の評論 第四

其第三節に於ては、人間には信仰なるものあり、而して其信仰は地位れ記號を帶び、常に性質に依つて形造ら丶るものなる事を說明せり、それ固より疑ふべからざる撼かす可からざる議論にして、別に評するまでのこともなけれども、餘りに其言ひ廻しの妙にして、餘りに其引證の面白きを以て、讀者の一覽に供せん。「……人間ノ嗜欲ハ必ラズ竟ニ其信仰ニ顯ハル、モノダ。譬ヘバ人ノ論說ヲ取ツテ細密ニ之ヲ咀嚼シテ見ヨ、其論說ハツマリ嗜欲ノ指揮ニ依テ集メタ實事ノ上ニ基クヿヲ發見スルデアラウ。熱情ハ己ニ反スル凡テノ證據ヲ抹殺シ、己ニ與ミスル凡テノ證據ヲ鎔解シテ己ノ目的ヲ達スルノ武器トスルモノダ。人ガ何トカ口實ヲ附テ惡事ヲ行フ、而テ之ヲ幾度モスレバ其口實ハ遂ニ信仰ト爲ラ子バナラヌ。歷史上パーソロミーノ殺戮ノ如キ、賤シム可キ憎ム可キ所業デモ、又之ヲ辯護スル者ガアツタ、否之ヲ以テ天意ヲ達スルモノトシタ。寓言ニ、狼ガ羊ヲ喰ハウトスル時ニハ先ヅ羊ノ罪ヲ鳴ラストイフ事ガアル、人間ニ於テ

モ實ニ其通リダ。昔カラ干戈ヲ動カシ旗旆ヲ翻シテ他國ヲ侵略シタ者デ、自分カラハ義兵ト信ジナイ者ハナカツタ、大ハシーザーノ野戰ヨリ、小ハ邊寇ニ至ルマデ、苟モ鬪戰ヲ爲スニハ先ヅ犧牲ヲ供シテ神祇ニ祈リ、神、我ヲ助クト號ビ、而シテ勝利ヲ獲タル者ハ頌歌ヲ奏シテ又神祇ニ其恩ヲ謝シタ。アツチラハ天我ニ世界ヲ統御スルノ權ヲ賜フタト自信シ、スペイン人ハ米州ヲ征スルニ、其土人ヲ化シ有難キ耶蘇教ヲ奉ゼシムルヲ名トス、又我英人ハ殖民ノ蠶食ヲ充スニ、天、英人種ヲ以テ坤輿ニ生息セシムルノ意ナリト聲言シタ。征服ヲ事トシテ飽クヿヲ知ラザル時ニハ、殺戮ガ常ニ此上モナイ善德ト爲リ、復讐ノ心ガ熾ナル時ニハ暗殺ガ一ノ義務ト爲ル樣ニ立チ至ルデアラウ。スパータ人ハ巧ミナル竊盜ヲ愛シタ、耶蘇信者中デモ又其通リダ。ジーソン及ビ其手下ノ者們ハ海賊ヲ豪傑ノ所業ト見做シタ、ノース族モ亦其通リダ、マレー人モ亦實ニ其通リダ

利ニノミ汲々タル社界デハ、營業ニ費ヤシタル時間ノ數ニ應ジテ稱讚ヲ被ルニモ種く々アツタ、今日デモ蓄財ヲ望ム爲ニ、勉強ヲ貴ブ樣ニナツタ、守錢奴デモ尚ホ其吝嗇ヲ辨護スル語ヲ有シテ居ル。參政權ヲ有シテ居ル者ハ、其權ハ人ニ附着スルモノデハナク財産ニ附着シテ居ル者ト思ヒ、貧民ハ、我々ハ他ヨリ救助ヲ受ル權利ガアルモノト思ヒ、僧徒ハ、印刷術ハ惡魔ノ發明ト思ヒ、今者ノ宗徒デスラ其異宗者ヲ惡魔ノ隷屬ト思ヒ「ク

ラージー」ハ國立教會ヲ以テ飽ク迄モ正當ニシテ宗教維持ニ必要ナリト思ヒ、且ツ此事ヨリ他ニ明白ナルモノナシト思ヒ、閑官ノ者モ輕蔑サル、氏ハ公ニ之ヲ責ムル理アリト思フテ居ル、而テ此ノ如キヿハ社會實ニ一般ダ」と。嗚呼何ぞ其考證の汎くして確なるや、吾人は實に是等の論文は到底半熟學者の夢想も能はざる所なるを信じて疑はざるなり。然れども氏が更に論歩を進めて、之を男女の關係に論及するに至つては、吾人少しく遺憾なき能はざる所なり。曰く、「黒人ハ人間デナイト云フ奴隷所有者説ト、婦人ニハ靈魂ガナイト云フ回教者ノ説ハ、顧フニ斯ル信仰ノ最モ奇ナル手本デアル。此場合ニ於テモ矢張前ノ合場ニ於ルガ如クニ、初ハ利己ノ所欲ヲ遂ゲン爲ニ牽強附會ノ理ヲ見出シテ、遂ニハ之ガ信仰トナリ、其理ヲ達シタモノデアル。中略 偖又英國ノ法律ト英國ノ輿論ハ、吾人ヲシテ不可思議ダト呼バシムル樣ナ、言フニ堪ヘザル趣旨ヲ胚胎シテハ居ラナイカ。婦人ノ權ハ男子ノ權ト一樣デナイト云フ思想ハ、細カク撿ベテ見タ氏ニハ何如ナル意味デアロウカ、實ニ唯女子ハ靈魂ヲ有セズト云フ説ノ變態デハナイカ」と。此斷案は實に極端に趨りたるものにあらずや、否男女不同權論者を餘りに極端論者と見做したるの斷案にあらずや。誰か之を讀んで首肯するものあらん、誰か又之を讀んで却つて其論據の脆弱なるを見出さゞるものあらん。兎角に反對の意見を有する者は、辨難

攻撃するに當り、相互に其極端に趨りたる所をつかみ捕へんと欲し、否強て極端に趨りたるものとして之を論ずれとも、是れ固より無益たるを免かれず、論議する者の實に注意すべき事なこそ、注意すべき事にこそ。

偖又氏は其第四節に於て、一國文明の進度は其女子を待遇するの狀態如何を以て之を知るべしてふ、ホルドルの言を引き更に進んで曰く「世界ノ情勢ヲ觀ルニ、男子ト男子ノ關係ヲ規スル法律ノ嚴酷ナル國ハ、男子ト女子ノ關係ヲ規スル法律モ同ジク嚴酷ダ、政治上眞理ヲ蔑如スル國ハ家裡ニ於テモ其通リダ。故ニ國家ノ壓制ハ必ラズ家族ノ壓制ト相隨伴スルモノデアル、此註解トスベキ事實ハ土耳其、埃及、印度、支那、露西亞及ビ他ノ歐羅巴ノ封建國ヲ指示セバ充分デアラウ」と。ろは誰しも別に非難せざるべき説なり、男女不同權論者も顧ふに之には異議を唱へざるなるべし。然れども頃日或る論者あり、此事に就き殆んど反對なる意見を陳述せり、固より賛成し得べき説にもあらざれども、讀者の參考に供せんが爲め聊か玆に附記す。曰く、元來一國及び其男子の性質は婦人を待遇するの如何に依つて之を判知するを得べしとは、到底實際に當て嵌まらざる論斷と謂はざるべからず。成程女子を待遇するに其道を得ず、唯峻酷こを用ゆるの國は、其男子の性質も峻酷にして、明らかに其進度の幼稚なるを認むることも得べ

きあり。又女子を待遇せる其道を得、同等の權利をも附し、相互に嘖々然たるあらば、其國は一般に同等の空氣を以て充滿し、進度の高亢をも證するを得ん。然れども稀には世人の許して以て開明國開明人となすものにして、往々婦人を待遇するに其當を得ざるものゝ如き狀態あるは何ぞや、又世界一般に野蠻國野蠻人と見做すもの、乃ち彼の亞拉比亞の「ワハビーテン」種屬の如く、又ベルベルモロツコの「ベルベル」種屬の如くに、奇體にも婦人を待遇する其道を得たるが如きは何ぞや。加之婦人を待遇する云々の議論を男女同權論者の口より出せとは、隨分奇怪なることといふべし。己に婦人を待遇せるといぬ、然らば待遇する者は男子なり、待遇さるゝ者は婦人なり、而して待遇せるものは主なりといふべく、待遇さるゝ者は客なりといはざるべからぞ。夫れ然り、而して主なる者は第一位に居るべきものなり、否居らねばならぬ者なり、客なる者は又第二位に居るべき者なり、否又居らねばならぬ者なり。然らば男子は第一位に居、婦人は第二位に居る者なり、是に於てか己に知るべし、其權利の不平等なることを、と。

論說

左の論文は三月廿六日より四月二日までの官報に譯載またるものなるが非常に有益のものと認めたれば茲に轉載す
讀者殊に注意して之を讀んで可なり

繪畫博覽會論

哲學士　フレデリック、ハリソン

本編ハ英國著名の哲學士フレデリック、ハリソン氏が美術上の時弊を痛論したるものにして、其大旨ハ二あり、一は博覽會出品其他現今の美術品が概ね抽象的に流れ、布置配合に着意せず、外圍境遇を顧せず、所謂美術は美術の爲めに存ずと於(Art of art)主義を妄信するの弊害あること、一は現在社會の道義文物の大勢を離れて美術の獨立旺盛を望むべからざること是なり。抑も歐洲博覽會の出品等は專ら新奇を以て人目と瞞着せんと試み、或は單に形似を求め、或は手法の巧妙を主とするに過ぎず、高尚優美の風を開達し、恭敬慈愛の情を涵養するに適ぜざるもの多し。本邦近來連に美術品共進會開設の擧あり、適々以て參考に資せば稗益する所蓋し尠なからざるべし。

展覽會、博覽會、及各種の巧藝は即今吾人の最も注意する所となれり。海内の賞鑑家吾人の嗜好の權を掌れるものは、日として畫師、流派、手法の功德に就き、伎倆の巧拙に就き、藝術の正處、邪處、善處、惡處に就きて論辯せざるなし。余素と藝事に通ぜず、此の如き至難の事に關して持論ありと謂ふ能はず、然れども竊に言へらく、吾人は繪画の區域、範圍、題目に關して、又繪畫の人生、人心、宗教に於ける關係に就きて、既に熟思審慮して遺す所なきか、即ち摸寫し得べきものは何、繪画の目的は何、古來藝運旺盛の時に在りて藝人の其事業本分となしたるとは何、此等至要至切なる問題に關して、我畫師は既に充分

明亮に講究したるなり。

且つ繪畫博覽會を開設するの習慣は、果して藝術を進歩せしむるに足るか、是余の先づ聞かんと欲する所なり。余の觀る所を以てすれば、近代の作物は一二を除くの外は、率ね皆終に博覽會に出品さるべく、又出品し得べしと信ずるよりして作られたるものなり。故に近代の作物は大抵單に出品せんがために作りたるものにして、博覽會閉會後は直ちに之を磨滅するも敢て不可なるなきなり。吾人は既に巧藝博覽會に慣れたり、故に此種の會館の畫師に必要なるとは、猶ほ紙、絹、刷毛の如しとまて疑はず。從來藝運旺盛の時に方りて博覽會の如きは、曾つて人の夢想にだも思ひ到りしことなきは、吾人之を忘れたり。

今若しプヰヂアス(希臘彫刻の大家)リツパンス(同上)ジウクシス(希臘ノ名畫師)アペルレス(同上)の諸家は、毎年四月各其作物を車載して之を展覽會に致せりと言ふものあらば、又若し新調の「キトン」「クラミース」等(共に古代の服)を着々たる市府の青年審美學者は皆「ニケ」の被服の襞積に就き、「イリツサス」の肋骨の彎曲に就き、「アフロヂツテ」の纖弱なる支體に就き、「エシン」の倨傲なる瞥視につきて抗論して止まざりしと言ふものあらば、吾人は之を會理するを得るか。ジヨツト(伊太利畫家)エンジエリコ(同上)ベルリニイ(同上)ジヨルンヨニ等の作物總て三千七百八十五幅、一大展覽室に雜陳せられ、ダンテ(伊太利詩家)ペトラルク(同上)ボカツシヨ(伊太利小說家)等の詩句載せて其目錄にありしと想像し得るか。「フロレンス」新聞羅馬雜誌の青年記

者も、各自其意を惹きたる流派を攻撃して毫も寛假する所なかりしが、又過譽を呈して却て作家を煩はしたることありしか。「スポザリジヨ」(ラフアエル所作ノ畫、)の審査委員會のために剪裁せられたることありしか。「マドンナ、サン、シスト」の「海上颶風の圖」と「紳士の肖像」との間に介して陳列せられたることありしが。チシアン(伊太利ノ畫家)れ「妄信の圖」チントレツト(同上)の「極樂の圖」の曾つてヴエニス美術院のために博覧會の出品に適せずとして、又陳列に不便なりとして排斥せられたることありしき。凡そ畫幅は猶ほ他の人目に訴ふる巧藝品の如く、之を置く所を擇ぶに於て最も愼まざるべからず。描く所周邊の諸物と相諧はざれば、大に不可なり。故に祭壇所懸の畫圖は、禮拜堂に置きて以て其莊嚴を増すべく、戰鬪の畫圖も公會堂に置くべく、人物の肖像も其品彙風俗に由り、或も舊廊に掲ぐるに宜しく、或も接客の室に掲ぐるも宜しく、「西岸の圖」「猫兒遊戲の圖」等の唐草の如きも、之を農家の閨房に掛け、而して後始て其價値あるを見るべし。然るに毎年開設せらるゝ博覧會に在りても、吾人未だ曾て一畫幅に其處を得さるを見ず、群幅雜然として混處し、上下顛倒、錯雜混淆、相撞着し相摩肩して、頗る支離滅裂の觀あり。今樂器博覧會を開設し、朝より暮に至まで、工人各其樂器を擁して、其音性を示すに於て最も宜しと思へる聲調を作して止まざらしめば果して如何。若し唯ビサの「カンポ、サント」「アレナ」寺「サンタマリア、ノヴエラ」寺「サンタクロチエ」寺「シスチン」「ウアチカン」「サンロツコ」黌「ドージ」宮等に於て、丹青を學びたるものとして、強ひて現今の博覧會に入りて其出品を品評せ

しめむ、之を極て奇怪ふ、極て煩瑣なること、すると、猶ほ一室の中に於て、衆樂器を亂奏して其善惡を鑑定せしめたると一般なるべし。

吾人嘗てチシアン、ウエロニイス、チントレツト等諸家所作の肖像を「ドージ」宮（伊太利セノア又は威尼斯の統領を「ドージ」と謂ふ）に於てウアングイク兄弟を「ジエノース」宮に於て永劫看守しつゝあるが如き豫言者若くは巫女の像を「シスチン」の穹窿の下に於て、「マンテーナ」を「サン、ゼノン」寺に於て「セナコロ」の最後の光を「サンタ、ヱム、デルレグラジイ」齋堂に於て觀、然る後始て「ヂニアス、ロシイ」即ち場所に由りて畫を觀るの感殊に深きを致すを知れり、均しく是ビサノ（伊太利建築彫刻の大家）の說敎壇なり、ミカエルエンジエロ（伊太利の繪畫彫刻建築詩賦ノ大家）の「ノツテ」なり、ギベルチイ（伊太利彫刻の大家）の諸門なり、而して之をピサに於て觀るとサン、ローレンゾに於て觀ると、洗禮所に於て觀ると、サイデンハムなる水晶宮に於て觀ると、南ケンシントン博覽會に於て觀ると、其人を感動するに於て淺深頗る同じからざるものあり。其れ然り然るに吾人は尚ほ每年聖母の像、洗濯婦の圖「サビン」畫名の果實の圖、「ビクウ井ツク」（小說の名）の諸齣が意を描きたる作物、レダ、ジヨンリン博士とボスヴエルとを並べ描きたる畫像、官服を覊けたるロルド、市尹諸公の畫像等を雜陳し其多きを貪り、五月の第一月曜日よは爭ひてハ、アリントン、ハウスに赴き、唯時好をのみ追ひて作りたる拙畫の中に就きてチシアン、ラファエル一流の人の作物を索む、嗚呼又何の心ぞや。

抑畫の眞に佳きものは之を博覽會場に於て觀るべからむ。畫格愈高ゝれバ其雅味を

損する愈大なり。近代の畫師ハ率ね出品のために畫を作ると雖も、間又然らざるものあり。即ち其自ら利するや大なり。即ちロツセツチーの如き作る所の畫巧ならざるにあらず、然れども其名の此の如く盛なるハ、其曾て出品せざるに職由するなり。若し然らずして其作物を雜陳して衆覽せしめバ、假令周邊の拙畫の其風致を損するものなきも、尚ほ其一種疎宕の趣を存するハ則ち難し。ボルン、ジヨンスの沈欝なる畫圖、若くハ美術院長所作の希臘詩賦の幻想を書齋若くハ應接室、即ち其當に在るべき所に於て觀たるもの、若し展覽會に於て其皇族殿下の肖像と扁青數法圖說との間に介立するを見バ其同一作物なるを認むる能ハざるべし。「アンドロマツク」「フライン」「ガラチイ」等自然に近く自ら女神の氣趣ありて、一見其希臘の古畫なるを知り得べきが如き作物と雖も、之を日曜日の午後縱覽人の雜沓する時に觀れバ、則ち又其撰を同じくせんのみ。

然れども博覽會の弊の最も大なるものハ、陳列宜しきを失ひて畫幅の趣味を損するにあらずして、寧ろ其畫師の風俗を紊すにあるなり。畫師の中卓犖不羈にして、肯て世上の紛々たる毀譽を顧みざるもの固よりあるべし、然れども其心を動さんとするもの常に絕えざるを如何。夫既に博覽會たる以上ハ多少の競爭なき能ハず、而して競爭にハ怪誕詭譎なるもの率ね衆目を奪ふものなり、故に虛名を釣らんと欲せバ、勢ひ一目瞭然せざるを得ず。即ち凡庸鄙俗粗野の人の眼中に於て、美なるが如き觀あるものを作らざるを得ず。此の如くにして虛名を釣らざれバ、則ち全く繪事を廢せざるを得ざるに至る麗

あり。夫競爭は常に極端に走らんとするものなり、而して一旦其極度に達すれば、則ち作常愕くべきものを作るにあらざるよりは、率ね平凡として錄せられず。是に於てか凡ろ采色、大小、方圓、題名、題目、木匡等に於て、苟も人目を奪ふに足るべき者は、畫師の奇巧あるもの業既に之を用盡せり。之を用盡したるもの必ずしも拙畫師にあらず、其事頗る詭計に類するものあり、是を以て自ら價を高くするものは之を爲すを潔しとせず、良心ある美術家は卑屈なりとして之を排斥して顧みず。果して然らば天下の畫師を驅りて此の如き競爭圈に入れ、以て其をして卑屈なるに至らしむるは、豈に吾人の當に爲すべき事か。博覽會の如き手段に依りて、群幅雜陳のために、逸材ある者をして其驥足を伸すを得ざらしむるのみならず、却て之を驅りて浮薄靡々の病に陷ゐらしめんとするが如き手段に依りてチシアン、ラファエルの亞流と出さんとするは、豈に智者のなすべき事か。

古來藝運旺盛の時に方りて、畫師の作物を衆覽せしむるの方、今に視ぶれば遍に異れり其之を公示するや、或は之を描きたる書齋に於てし、或は其目的の所に於てす。第一の場合に於ては、畫師其心に適ひたる者のみに示し、第二の場合に於ては、畫圖完成の日、禮を以て公衆に示す。フヰヂアスの刻したる「パルセノン」の「アシーニ」の女神の像、破風に刻したる神仙豪傑の像「ハナセン」の幽薄圖、「セントールス」「ラピシー」等は遍く諸展覽會に遞致せられ、アリストファンスの詩句の意を寫しある作物、遊蕩の圖「アルコン」ペシリア

ス閣下に奉呈したる畫像等の間に介して、衆覽に供せられたるとありしが、「エシーニ」の像を「バルセノン」に装置するに方りてや、爲めに盛宴を張りて之を祝せり。此日市民、官吏、僧侶等各其子弟を携へて、アクロポリス雅典の本城をいふに到り、讃美歌の洋々たる中、寄附供物の累々たる間、此神工の手作を群觀し、且つ嘆美せりと云ふ。又チマブエ伊太利の畫像の「マドンナ」の像を作るや、フロレンスの人民府を傾けて其上壇式に臨めり、此日民衆の業を休むこと猶ほ「アンナンシエーション」祭礼時の如くなりしと。「マドンナ」は今尚ほ掛りて聖壇に在り。又ラフアエルの歿するや、之を葬るに頗る鄭重を極めり、其「化身」の幅は高く之を柩上に掲げり、此日士女府を傾けて來り觀る、皆故畫博士と其生前最後の作とを視、轉驚嘆欽慕に堪へざりしと云ふ。嗚呼是藝運旺盛の日に方りて、畫師の作物衆覽に供せし方なり。

論じて此に至れば、吾人は猛然として反省する所なくんばあらず。想ふに近代繪畫博覽會の彼の如く夫亂雜なるは、弊の小なるものにして。其大なるものは實に巧藝の十九世紀の宗教的、社會的、智識的の運動より分離したる邊古の遺法を守りて、人生の最大勢力を助長するを忘れ、漫に自ら師として私智を揮ひ、私意を逞くする所にあるなり。是直に美術の衰へたる所以、藝運の萎靡振はさる最大原因にして、教養の素なきと伎倆不熟あるとは、寧ろ第二の原因なりとす。古の畫師は眞率に其々の宗教的社會的、及巧藝的の通論を奉じ、其伎の當時の宗教的、社會的、及學術的の運動を代表するを信じ、此運動を形

容し潤色するを以て其畢世の事業となせり。故に其藝術ハ獨善自足のためにもあらず、世敎に關係せざる徒技にもあらず、實に精神界の最も深邃にして最も勢力ある所を發揮せる巧藝的の一手段なりしなり。畫師ハ從僕なりしあり、自主自由にして一種の創造力を具備したる從僕なりしや疑ふべからずと雖も、畢竟するに詩人、學者、僧侶、政治家の從僕なりしなり。ペリークルス（希臘古代の政治家）イクチナス（同建築の大家）フヰヂアス（同彫刻の大家）等の「パルセノン」に於て從事したる事ハ各異なれりと雖も、其奉したる主義ハ皆同一なりしなり。リシツパス（希臘古代の彫刻家）ポリクレタス（同上）ジウクシス（同畫家）の作畫ハ一の經綸なりしなり。羅馬の一大政治家ハ、巧藝史中一種特別の意匠なりと稱せらる、夫の「パンセヲン」（羅馬の古寺院）と其名聲を均くせり。ジヨツト（伊太利の畫家）ハ「アレナ」寺にありて、ダンテ（伊太利の詩家）の目前に於て作畫せりと云へば、其詩伯のさゑに感發せられたるや知るべきのみ。其他ギベルチー（伊太利彫刻の大家）ブルチレルスキー（同建築の大家）マオテニヤ（同像畫の大家）等の如きそ、人智の驚くべきまでに開發しさる時代に於てすら、尚ホ能く社會の率先者なりしレヲナルド、ミカエル、エンジエロの如きも亦設令筆を執りて紙絹を拂ふことなからしむるも、尚ホ勢力ある人物なるべし。而してラフアエル（伊太利の畫家）ベンヴエスト（伊太利の畫家）のチシアン（伊太利の畫家）ヴエラスケー（西班牙の畫家）ジヤングージアン（佛蘭西の彫刻建築の大家）ルウベンス（白耳義の畫家）レイノルヅ（英吉利肖像の大家）の如きも亦當時の賢豪長者を友として之と比肩せしものなり。

繪事ハ固と人間智巧の第二義にして、其第一義にあらず。故に之を勢力、信仰、思想と分

離せば、即ち其忽然として萎靡浸溺せさるもの鮮なし。近代の画風は率ね怪誕不稽なりと云ふべし、彼画師も所有一切の規矩準縄を排斥し、信仰、智見、法度に拘るを屑しとせず、萬事其私智に任せて處理し、上神裁日より下家箘に至るまで、一切の事、一切の物、皆取りて題目とすべしと言へり。加之一時の浮想粗野の嗜好を以て準的とし、且つ以爲らく此の如くならざれば以て夫ラフアエルをして始終「マドンナ」を描かしめ、始終「イウロパス」「アリアドネス」「アフロヂデス」を描かしめ、ミユリルロ（西班牙の畫伯）をして始終天使を描かしめたる習俗の覊絆を脱し、以て好題目を擇ぶに足らずと。近代の画師は猶ほギルベルト氏の諷刺、滑稽、狂言を戯作し、ライタア、ハツガアド氏の新小説を編述したる時の如く、其題目を擇び、其法度を定め、其意匠を用ふるに於て、曾て牽制せらるゝ所なしと惟へり。

然れども繪画の小説に異なる何ぞや。蓋し画師乃技たる之を詩人傳奇家に視ぶれば、大に限局せらるゝ所あり、画師如何に天才ありと雖も、其作物をして變化百端、靈幻絶妙機趣流溢して絶ゑざらしむると詩人傳奇家の如き能はず。其執りて資とするものは、采色生氣自然の調和と、突然一齊に人の想像を刺激するの便利とに過ぎず、而して美も亦其材料の一たるを得べし。然れども画師の此便あるは即ち不便なる所以にして、之がため母画師は目見し得べからざる事物を描くを得ず。之がために画師は一轉瞬間の出来事の外、又他事を寫す能はず。之がために画師は人の知らざる所のものを描く能はず、其

他画師の題目を説明し能はざる、其顛末始終を告ぐること能はざる、言語に由りて乃み人に傳へ得べき事は之に觸る、能はざる、皆之がためならざるはなし。夫用ふる所の材料既に此の如し、然らば則ち画師の厭ふべく、怖るべく、又驚くべき事を發揮して愉快なる能はざるも亦宜ならずや。

凡そ玆に論ぜる所は皆太だ觀易き理にして、古來藝運旺盛の際、人々の依傍して敢て違はざる所のものなり。而して我画師之を見て以て迂闊爲すに足らずとも、是を以て其題と命するや、怪談詭譎、至らざるなし。古來藝運旺盛の際は則ち然らず、画師皆約束を奉ぜるの止むべからざるを知り、又繪事は人間の他の諸勢力に根底をべくして、獨善自足す可らざるを感ぜり是を以て其題目を限りて、又妄意撰擇せず。凡そ宗教、美術、習俗に於て、當時人々の標準としたる所は、之を推奉して敢て違はず、其感思は平澹明白ならんとを勗め、又力て私意を去り、奇矯を去り、妄想を去り、詼謔を去り以て、鄙陋卑しむべきに至らざるを期せり。故に古画師も號して大家となるものは、常に命ぜざる題あり、偶命ぜざる所のものは平澹明白、一見其意を解すべき者のみにして、率ね宏莊高尚に、又明亮なる宗教的神怪的、社會的の標準なりし〻、画師大抵美を以て其的彀となせしなり。然るに近代博覽會出品の画幅を泛覽するに、啻に觀る者をして抱腹せしめ、怪訝せしめ、呆然たらしめ、嘔吐せしむるの外、殊に佛蘭西に於ては猥褻の感を發せしむるの外、別に目的とする所なきもの丶如し。古画展覽會に在りては則ち然らず、其画の題目は目録を撿せ

さるも之を知るを得べく、其題意の在る所はボスウエルのジヨンソン傳マコーレーの英國史「コヴェントリイ、パトモア」若くは「ウイダ」等を讀まざるも之を察するを得べし。古畫師の中シエルリーの「雲雀」スウヰンバルンの「拂曉の曲」の意を描かんとしたるものなし。其擇ぶ所の題目は、人々大に異なることなく、大抵平澹明白、望みて其意の存する所を知り得べきもののみなり。チシアン伊太利の畫家ホルベイン日耳曼の畫家等の肖像を作るや、只人々の實際を直寫して、妄に奇衣を著け、異服を衣せて、假裝踏舞者一樣の觀をなさしめず。其題目とする所、夫此の如く僅少に、其意此の如く平澹明白通俗なりしと雖も、而も平凡の病は曾て之なく、總て高華飄逸なりし。何ぞや。他なし、彼等の目的とする所、信傾、習俗、風雅の古標準を潤色するにありたればなり。

信傾、習俗、風雅の古標準の以て吾人の用に充るに足らざるや爭ふべからず。古標準は既に漸盡磨滅せり、吾人は更に新標準を作らざるべからず。苟も見識あるものは、何人も古標準を今日に回復するを欲せざるべく、又此の如き峻法を以て、美術を撿束するを欲せざるべし。三世紀前歐洲は既に其羈絆を脱せり。「マドンナ」ヴアジンマリイをいふ「セント」聖者等を生じさる信傾、神怪、荒唐の說、奇異怪しむべきの談にのみ限局せられたる詩賦、文章、貴族的の誇張、懶惰、凶暴、驕奢に根底せる習俗等は、淺薄にして世道に關らず、以て久しく推奉するに足らず。近代の文化既に之を排斥せり、而して美術も亦然かせり、今に於て之を回復し得べしと謂ふは、寧ろ痴人の夢を談ずるものなり。

此の如く美術の古標準は既に亡びたり。然れども古標準亡びたるが故に、繪畫に標準、根底、法度なきも可なりと謂ふべからず。又畫師は其私意を以て其法とし、其僻好する所經歴したることを以て其畫の題目となすべしと謂ふ可からず。然るに實際の事頗る之と齟齬するものあり、即ち美術のある所、宗教なく、古畫師の口傳は泯滅し、繪畫の詩文詞に從屬したる美風は蕩然地を拂ひ、民政主義の繪事に跋扈すると政治習俗に於けるよりも甚しきものあるに及べり。若し畫師にして「スチユアルド」家マリイ、アントアネツト若くは王族を愛好せば、其「トーリイ」党となり、忠君黨となるは必然の理なるが如し。然るに實際絹素を拂ふ方りては、各私智を逞くし、肆志任意、法度を規定し、曾て歴史の傳ふる口傳遺法を意とせず、唯意とせざるのみならず、又宜しく此の如くすべしと思へるもの滔々として皆是なり。

藝運旺盛の時に際し、藝人の題目を擇ぶや必ず其々の約束に違はざるを期せり。其命ずる所の題は、平澹明白、高尚瑰麗にして、而も人口に膾炙したる者のみなり、頗る近代命題の晦澁、奇矯、放恣、委瑣なるに類せず。希臘の古作家はフ井ゲアスより皆ホーメルの歌頌せし神仙、豪傑、歴史上の大紀念、崇拜尊重敬慕の府たりし人物、嬌名全都に噪しかりし美婦人、演武に名ありし格闘者等を描寫するを勗めり。又ラフアエルの徒と與に衆信を負へる高僧智識、人口に膾炙したる神怪の談、歴史の傳ふる賢豪長者及非常愕くべきの事を描くを勗めり。然れども題目の古なりしと新なりしと神聖なりしと凡俗なりし

とに拘らず其描く所のものは、常に平澹明白高尚瑰麗にして、人口に膾炙したるものなり。近代の作家は、則ち然らず、彼畫師は新奇怪談の事、唐突不經區々の事、滑稽笑ふべき事、法外怪しむべき事を創叙するを以て其畢生の事業となし、平衍なる新詩瑣末なる新小說、眞率若くは滑稽なる乾燥無味の逸事を描くを以て其本分とするもの、如し。畫師は詩人にもあらず、傳奇家にもあらず、又文學上の工人にもあらず、畢竟其描く所の小詩、閑話、論文は夫地方新聞の欄を塡め、詞藻を顔せられ、奇聞閑話と題せらるゝが如き作物と大に逕庭する所なきなり。苟も多少の識見あるものは、何人も其滑稽詼謔を聞くを樂み、其諸家文抄より剽竊し來る作物、又は巧藝德義に關する私憤を紙絹の上に漏しゐるが如き作物を顧るものなかるべし。而して獨り畫師之を悟らざるは何ぞや、蓋し畫師の號して新題目を發見したりとなすものは、率ね皆拙劣奇怪なるものを發見したるなり。大學書目の強半を塡充して、所謂歷史の畫題目と稱せらるゝ、逸事、エリザベス女王の汚行「スチアルト」家王族某々の任俠、スウヰフト、ジヨンソン、スコツト等の奇言奇行「テルロル」の時の異聞奇談等の如きは、出處甚だ疑しきもののみならず、委巷瑣末の談にして率ね收錄するに足らず、況や其中全く虛構に出で、鄙陋厭ふべきもの少からざるに於てをや。然れども若し題目にして奇衣袨服ワルドー街頭見る所の斑衣等を描くに適せば、則ち視て以て平凡鄙俗下末ならずとするもの往々にして之あり。嗚呼此の如く小詩人なり、拙稗官となるは、豈に畫師の事業とせんや。吾人の信ずる所を以てすれば、

畫師は平澹明白、高尚瑰麗ならして、而も久しく人口に膾炙したる事物を描き、以て吾人が從來尊重愛敬娛樂せる所のものを潤色すへきものなり。其事業は其時の信頒、紀念、智識の精華を取りて之を光大にし、潤色し、鼓吹羽翼せるにありて、決して吾人をして呆然たり、瞠若たらしむるにあらず、又最も吾人をして頭痛斧々たらしむるにあらず。

画の題目を擇ぶに古法と固守して敢て肆志妄作せざりしは、我美術院諸先輩の名譽なり。而して之が首唱たるものは實に美術院長其人なり。美術院長の修養の素あると、嗜好正しきを得たるとは、其概然卒先して以て繪画の真成を範圍域區と、其目的とを天下に宣示したる一事に就ても窺測するを得べし。若し余の言の溢美なるを疑ふ者あらむ、試に美術院長の初作を取りて之を視よ。即ち思半に過るものあらん。始め美術院長の藝苑に現はるゝや、一畫を作れり、蓋しチマブヱ作る所の「マドンナ」の圖を「サンタ、アリア、ノヴエラ」寺に送る一行のフロレンチを通過せる圖なり。其命題誠に平澹明白、高尚瑰麗なりと謂ふへし。近代畫師の題目を擇ぶ、當に此の如くならざるべからず、此畫の理想は必ずしも斬新なるにあらず、然れども從來の筆法を用いて、巧に此巧藝史中最も惋惜感傷すへき事實を描きしものなり。之を近世畫史名の一節に朱色を施したるものと謂ふも不可なかるへし。但し余の茲に論する所は、止に其題目感思に就て言ふのみにして、其技倆の巧拙を評するに非ず、要するに其題目は極て佳なりしなり。爾来四十年美術院長の畫を作る其數少しとせず、然れども其題を命ずる當に宜しきに適へり。即ち皆希臘風、

神怪風、歴史風の題目にして、平澹明白、高尚瑰麗通俗なるものにみなりし。ケンシントンにある「タフネフォリヤ」「ライン」「シモン」「ヘミサイクル」等の題意は、必ずしも其の歴史を繙讀し、古物字典を按ぜざるも、之を解するを得べく、苟も多少の教育ある者は、一見直に其題意のある所を察し、其平澹明白瑰麗にして、頗る人を動かすものあるを認めざるなし。便ち今年所作の「アンドロマアク」の如きも、亦其題目極て佳し、苟も多少の教育ある者は假令「イリアード」の詩句を記臆せざるも、能く其何事を描きたるやと認め、其典雅絶麗、感慨淋漓、悲境壯境無備るを認め、然る後所謂希臘風の迹を細尋して以て其智見嗜好の完粹なると、巧み艶筆を揮ひて能く古詩家の意を發抒しさるとを欣賞せさる者なし。吾人の論ずる所は唯繪畫の題目のみ止まると雖も、然れども畫師の高尚完粹なる形の中に、限りなき雅懷を寄するの術も亦實に此處にありて存するなり。

ワッツ氏も亦題目を擇ぶに古の遺法を奉ずる人なり。其所作の畫「黎明」「死亡」「愛戀」「期望」等諸圖の如き、皆其題目を擇ぶに平澹明白ならんことを力めり。氏の作物は時に晦澁荒誕の病なきに非ず、然れども瑣末厭ふべきは則ちなし。蓋し詩人は當に高遠幽晦なるを得べきのみならず、間々粗豪の筆を雜ふるも不可なるなし、然れども若し畫師にして此の如くならば、其大なる謬らざるもの鮮なし。それ畫師の用ふる所の器械材料は、單純不變にして其用に限あり、以て畫師をして揮灑自在なるを得ざらしむ。故にミカエル、エンジェロに非るよりは、畫師は默示を描くべからず、婦人を以て母とせざるに非るより

は、畫師は神秘奥妙の事を寫すへからず。若し之を描寫せば、則ち晦澁の弊筆下に湊らん、若しそれ畫の晦澁なるものは探畫と擇ぶ所なきなり

此題目に關する古の遺法は確乎抜くべからざるものにして、能く之を推奉したる者少からず、而してボインテル、アルミテージ、ロングツチモンド諸氏の如きは其尤なる者なり。諸氏所擇の題目は率ね平澹明白、高遠瑰麗なるものなり。諸氏の中ロング氏は稍故事有職の穿鑿に過て、氏の愛讀せるダイヲドラス、シキュラス（シ、リーの歴史家）の著書を按ぜざれば其意を解し難き所往々之あり。而して氏の平澹明白を尚ふ巧藝の原則に乖戻したる所も亦實に此處にあり。其他アルマ、タデマ、サージヨンミツレイス兩氏の如きも亦少く議をへきものあり、即ちサージヨンの如き、時に歴史的の想像的の出來事を描くとあり、然れども最も氏の画を愛玩するものと雖も、尚ほ此種の諸作を視て、氏の得意の作とすると能はざるべし。何人に限らず紙絹の上に小説の一節を描かんと試みれば其失敗せざる者幾ど罕なり、即ち「ヒユークノー」（佛國舊時の耶蘇新教徒の稱）「放釋令」の兩圖の如きは、方に此病を免れたり。其他「防火夫」及之に類する諸作は、又此兩圖と其揆を同じくせざるか疑ふべし。之を要するに画師の本務は畏懼すべき事、若くは痛心すべき事を描くにあらず、此の如き事は始終同調にして變化せざれば、終に人をして厭倦するに至らしむるものなり。然らば則ち画師の本務は如何、唯平澹明白高尚瑰麗なる事物を描くにあるのみ。

前記の通弊の如きは尚ほ可なり、然れども苦心焦慮、拘々屑々として兒戯に類する滑

稽の画圖を作るに至りては、其画師の本務に遠かる愈大なりと謂はざるべからず。即ちアルマ、タデマ氏のエリヲカハラス（羅馬古代の暴君）の圖の如き、其運筆巧妙ならざるに非ずと雖も、其題目感思は極て拙なり。此圖の命題は、凡そ題目に附着し得べき一切の缺點を具備したるものにして、平庸なると共に詭譎、鄙深なると共に浮薄陋劣なるものなり。此の如き憐むべき動物の、偶然帝位に即きたるものを追懷する、事既に正道に非ず、然るを況や兒戲に類せる逸事の到底摸寫し得べからざるが如きものと、其の醜行紀事に就て撰取するに於てをや。是直に巧藝の體面を汚せる人間の感情を辱しむるものと謂ふべし。余殊にアルマ、タデマ氏に於て惋惜すといふ。蓋し氏は天稟の画才あり、若し氏をして早く其非を悟らしめば、即ち其古史研究の得力才分更に一層の光耀を添へたるや知るべきのみ。蓋し近世の畫師中氏の如きは、最も能く「キトン」及「トーガ」（共に古代の服）を襲くるに堪ふる者なり、唯惜む動もすれば輙ち古物の癖に謬られて、穿鑿に失するの傾あるを。若夫れ氏の本務とすべきは、其學識腕力を盡くして古代の寺院、宮殿、生活、思想、勢力、光耀、美觀若くは其短處弱點を描くにありて、決して其兒戲を寫すにあらず。

題目を擇ぶに最も古法を遵奉して、循々焉として毫釐も違はざるを期したるもの、古今唯一人あるのみ。曰くバアン、ジヨンス氏是なり。氏は好みて神怪荒唐の談を題目とせり、即ち希臘人の間に行はれたる閑話様のものを取りて、之を藝術中興時代の精神を以て理會し以て其畫の題目となせり。氏の畫室は常に神怪的の作物を以て充滿せられ、恰

もサートーマス、マロレーが希臘の古典を飜譯して、一部の神怪傳を著したるが如き觀あり。此の如く氏は常に「ペンセロリ」所作の詩の如きものを題目として揮灑せりと雖も、然れども皆平澹瑰麗高尚にして、而も久しく人口に膾炙したるもの、みなり。唯此等の諸作は果して能く明白なるや、荒唐怪談の病なきか、又時としては奥妙不可思議の病なきかに至りては、少しく疑なき能はず。然れども氏の如く始終隱居獨處して、自家特有の幻境に遊ぶものは、勢ひ一種の人のみを以て其華客となさゞるを得ざるべし。故に氏は少數なれども能く藝術の趣味を解し得る此一種の人たるために欣賞せらるゝを樂みて、將に其他を顧みざらんとも、蓋し尚ぶ可きなり。夫のロツセツチーの如きはバアンジヨンズ氏の流亞にして、其殊に甚しきものなり。ロツセツチーも亦別天地に隱居せり、所謂別天地は唯ロツセツチーに類したる少數の者のみ能く之を理會し得れども、他の衆人は則ち能はず、故に若しロツセツチーが空想の題目を知らんと欲せば、先づ特に之を研究せざるべからず。此の如く自己一個の爲に、自己の獨力を以て、自己のみ空想に耽らんが爲め苦心したるもの、ロツセツチーを措きて他に其人を見ず。蓋し彼は詩人なりしなり、彼の企圖せし所詩人としては正當なりしなるべし。若夫畫師は則ち然らず、其作物の平澹明白を欠くは則ち晦澁靡曼の弊に陷る所以なり、故に畫師は唯鑑識家及先覺者の事物のみを撰びて以て題目とせば、則ち其過なきに庶幾からんか。　（未完）

左の一篇は中川氏が獨逸のルイゼ、フュフチル女の著を譯されしものなるが嚮に本誌に掲げたる家政教育論、及び女子精神的教育論と相離つへからざるものなれば、吾人は必らず之と參照せられんことを讀者諸君に望まざるを得ず。

母の務　第一編

中川重麗譯

妾が以上に論じたる家政教育、精神的教育等の主義に遵ひ、其の發達を期したる家族生活の繪画を茲に目前に掲ぐるときは、人皆必らず言ふならん、人の心に感動を與ふるもの蓋し地上に此の右に出づるものなかるべしと。而して人の想像の中心は實に最美の意味を含める文字にて表彰したる婦人其人なり。斯かる婦人は則ち茲に美と力との新世界を造り出し、此の美此の力は四圍八面に幸福の陽氣を發し、以て一家和樂の春を招くべし。如何に有德なる男子ありとて、其の婦人も此の德なくば決して此の如き和樂の天堂を築き得ざるなり。されば男子の地位をして限りなく高からしむるも、又低からしむるも、一に此の自由は婦人の掌中に在り。婦人は宜しく人道宗の高僧となり、家の竈を以て祭壇とし、自家胸中の美を以て此の壇階には一事の不潔、一事の不眞、一事の不貴を近づく可からず。

然りと雖も百事調和を得るに非ざれば之を美とは謂ふ可からず、即ち第一の注意は

婦人其の人の本體の調和如何、此の調和は果して光彩を放ち、四邊に徹せりや如何と云ふことに在り。是を以て先づ家内に物質的の安寧快樂を得るは、幸福なる家族の生活と造る第一の要素たり。何となれば婦人は常に細心して、已が良人已が小兒の何處に到るも、我が家より快樂多き地は無しと思ふまでに至らしめざる可からず。而して斯く思はしめんと欲すれば、半は其の方便を有形上の快樂に資り、以て良人小兒の心を繫ぎ、幸福の花を開かしむること肝要なればなり。良人が快樂を戸外に逐ふは、其罪十中八九まで婦人に在り。若し婦人にして愛多く、自己の上と家政の上に此の靈妙なる愛の力と弄せば、良人の心を家族生活の上に繫がざらんと欲するも能はざるなり。

之れと同時に必要なるは、良人に對する精神的の内助、小兒に對する精神的の支柱、及び狹小にして親密なる朋友仲間に對する精神的の愛嬌是れなり。而して此の三者は決して彼の虛名高慢の心を以て得べからず、唯此の目的に達するには質素なる方便と、眞率なる關係とを要するのみ。思ふに眞正の美は富有を要せず、光澤を要せず、毫も其の物質如何の上に拘らずして、唯其の之れに與ふる形象如何に在り、唯其の之れに吹込入る、精靈如何に在るものなり。故に眞正の敎育修養の素ある精神は、其の固有特殊として、一擧一動頗る單簡なる現象と雖も、總て愉快に感ぜしむるを得べく、之に反して

貧弱なる精神は、外觀虛飾の光澤より他に一も所有なく、華美艶妖の衣裳より他に一も所有なく、奢侈贅澤を表するの居室、山海珍味を列ねるの食膳、此れより外には一物の所有なし。斯かる死物は冷灰に均しく、何の趣味も無く、何の愛嬌も無し。却つて他の生活上到る處に餘りある普通の物品なりと雖も、高尚なる婦人は此に因つて以て清潔にして甘美なる精神的の珍味を得べし、美麗なる裝飾を得べし。決して彼の贅澤三昧、驕奢の沙汰を以て之を美とは謂ふ可からざるなり。

此の故に理想ある母親は常に意を此に注ぎ、其の小兒を教育するに當りて、質素と謙遜の心を主として啓發せざるべからず。小兒には幼稚よりして敎へて形と體とを相辨ぜしめざるべからず。然れとも其爲めに此の二者孰れをも輕蔑せざらんことを肝要とす。蓋し歡樂嗜慾の念は、教育ある母親の手に因りて大抵は矯正せらるゝものなり。何となれば斯かる母親は家内の快樂により、又種々瑣末の事件によりても愉快を惹き起すの方便を解すればなり。即ち家庭に於て幸福を感じ平和を得るに、夙に習慣を積むものは、男子にまれ女子にまれ、絶えて戶外を思はず、放蕩遊惰の人となることもなし。此の放蕩遊惰こそ世の多くの男子、多くの女子をして道德世界より墮落せしむる惡魔にして、實に其の種子は幼稚教育の時に芽を含むものなり、思はざる可からず。凡

そ一家の祝ひ事は此の教育の目的に甚だ緊要なるものなり。是ぞ實に母たるものが執行すべき神聖なる務なり。此の方便を用ひて小兒の美情及び秩序の心を惹き起し得べし。且つ僅少の費用を以て其の事を成就し得るが故に、一家の境遇が如何に貧窮なればとて、日曜の小祝日、誕辰の小祝宴の爲し得られざる程のものは蓋し中等人種に稀れなるべし。一二の草花、一二の菓子、又一二の細工を以て、特に小儀式を設け。祝日祭日の趣旨をなせば、小兒の眼光には悦喜の心の溢るゝを見るべし、即ち祝日佳節の快樂は、物質的の外界の美を籍つて一層の多きを加へ、此の如くして時々小兒の心に幸福を與へ快樂を得せしむる時は、母の恩愛に化せらるゝこと至りて深く、知らず識らずの間に感情の薫陶は、活潑なる幼稚世界に高尚なる精神的の羈絆を繞らし、純潔なる風俗上の感化を施し、其の兒は年長して後に、各々氣質性質等に異同ありと雖も、一家族の一人として最も親密なる好侶伴となるは疑ひなし。

高慢にして逸樂に耽る婦人に在りては、固より此の如くに小兒と倶に相樂しむの時間なし。されば妾は確乎自から信じていはんとす、世に母親多しと雖も眞に母たるの名を下し得る人幾何ありや、洵に曉星啻ならざるの觀ありと。是れ豈に恥辱の小なるものならんや。而して此の恥辱を蒙むる所以を考ふるに、一に小兒の胸中に善の諸萌

芽を窒息せしむるの罪に在り。　蓋し善の諸萌芽を發育せしむるの法は、小兒が我が家を思ひ、我が親を思ふの愛情の絲を紡ぎ出すを以て發端とす。　然るに此の二物、即ち家と親とを度外に置きて、敢て小兒教育の事に意を用ひざるより、遂に此の萌芽は盡く窒息するに至るなり。　母は即ち小兒の心の故郷とならざる可からず。　母は其の子に對して理學的の教育(體育)と、精神的の教育(智育)とに重大の責を負ふが如く、小兒の心即ち感情の故郷たるの責任を負ふものなり。　而して既に前の二者を買ひ得るの資ある人ならんには、此の第三者は容易に手自から成すを得ん。

然りと雖も怠惰或は無能の婦人は必らず此の事をなし能はず。　何となれば斯かる婦人は己が本分の何たるを辨へず、一も正當の觀念なく、從つて手を下すの術をも解せざるが故なり。　加之縱し其の性は善なるも、智は敏なるも、已が小兒に達する責任の如何を覺るにあらざれば、決して婦人は其の正當なる地位に立つ能はざるなり。

文藝

○詠史十二首

村上正雄

和氣清麿　よを宇佐の、神のいふきや、そへりけむ、君がことあけ、清くもあるかな。

義家將軍　みちもせに、散りしさくらの、香細しき、名こそはよゝに、猶は匂ひけれ。

清少納言　品ゝに、四つの時をも、さでめてし、ことはの花も、おかしかりけり。

木曾義仲　雲のうへに、見し赤旗も、木曾の山、いづる旭に、いろなかりけり。

平　實盛　直垂の、たれとしる人、なかりせば、きぬるも夜の、にしきならまし。

梶原景季　益荒男の、箙のうめの、色香には、さきあらそひし、花なかりけり。

長年朝臣　たらちねの、伯耆の手ふね、はしきやし、三つ子の島の、君もそだてつ。

織田右府　色にいで、見えけむものを、仇心、ありのひふきと、などしらざりし。

豐　大閤　瓠もて、みづから君が、渡りなば、ありなれ河も、汲みふさましと。

清水宗治　名も清く、世ゝにながれて、高松の、たかくきこゆる、水乃おとかな。

漢　高祖　習はせし、兒らがうたの、雲風に、あはれ涙れ、雨のふるさと。

孔　明　高どの、たばかりことの、たくみ手に、あたの軍も、ひかせつるかな。

楠公三首　町原熈麿

ゆめにさへ、そことみなみの、木のもとは、世に出ましの、君が御舍り。

あし原や、みだれて東風の、はげしきに、動かで立てる、楠の一本。
日の本の、花の花とや、さくら井の、ふかき色香を、世よに傳へて。

正誤。第五號に掲げたる淵麿大人の五色の歌「黄」の中にいそねの里とありしは岩手の里の誤植。

若江薫子は京師の女流、其氣高潔にして節義あり、能く和漢の學に通ず。維新の際、外人の跋扈を憤り、心常に國權の振興を希圖すと雖も、身は裙釵の群れにあつて家又た貧、遂に一生を憂悶の中に終ふ。薫子また國風を能くす、慷慨禁ずる能はざるに及んでは、之を三十一字に洩らして自ら慰むるといふ、予が家薫子の咏三四を藏す、蓋し今よりして之を見れば、少しく頑陋の嫌なきにあらざるべしと雖も、敵愾の氣躍然として紙上に溢れ、また以て誦するに足れり。乃ち寫して左右に贈る、若し一材料となるを得む、幸甚。

識於將軍虎皮下　　峡月　散史

○雜の歌五首　　若江薫子

富貴不能淫　きぬえをば、失ふましと、おもはぞべ、うはる心は、あらましものを。

貧賤不能移　さちなくて、其身はうえつ、こゝゆとも、清き操は、露もけがさし。

攘夷　御國母は、さとへ人種、つくるとも、このまゝえみし、物とてはせじ。

攘夷説を唱ふれむ人々頑愚固陋と笑ふを聞て　おろかぞと、人はいふとも、厭まじ、こゝろに恥る、こともなければ。

洋癖人をよめる　かしこくも、我すめ國に、うまれ來て、などことかたに、心よそらむ。

左の詩はウィルセー、マーチン氏の作にして「ヤング、レデース、ジョーナル」に掲載

しありたるものなるが、餘程面白きものと見受けたれば茲に轉載することゝせり。

I DREAM'D A DREAM OF AN OLD, OLD LOVE.

I

I DREAM'D a dream of an old, old love,
  And sweet was that dream to me;
For it brought me the time of my early prime,
  And life as it used to be.
We walked once more to the village church,
  'Neath the blue of the Sabbath skies;
Down the trysting lane, to the sacred fane,
  With the light of young love in our eyes;
And again, in the dark pine-woods we stray'd
  Away from the noontide heat,
Where only the thrush broke the silent hush,
  As I lay at my darling's feet.

II

I drean'd a dream of an old, old love,
  And sweet was that dream of bliss;
For it brought me a hand from the Spirit-land,
  And a touch of a spirit-kiss.
A sense of happiness, pure and strange,
  As a dove on my bosom lay;
With the breath of a wing, with an odour of spring,
  My sorrow had pass'd away.
So, I know my old love as an Angel lives,
  Beyond where the pale stars shine,
That she came from above, on a mission of love,
  To bring peace to this soul of mine.

"By Solent and Danube" W. WILSEY MARTIN.

松平定信は幕府中興の賢輔、致仕して樂翁と號す、學を嗜み文を善くし、著はせし所極めて多し、而して花月草紙尤も巧妙、蓋し花月草紙の文、極めて淡極めて平、毫も細心を費やさゞるが如し、然れども仔細に看来れば、一字百鍛、隻句萬錬、咳唾悉く珠玉なり、而して其中雨の記最も輕妙誦すべしと爲す、苟くも邦文を學ばんとするものは、須らく此等の文章を把り、百回も朗讀せざるべからず、是れ吾人が爰に之を掲ぐる所以なり。　明治二十二年五月雨窓に於て　編者しるす。

○雨の記　松平樂翁

月の夜半こそ、思ふくまもなく心の底もすみわたりぬるものなれ。されど、やみの夜の空晴て星の光りさやかなるに、風さかく吹きかふは、また増りぬるやうに覺ゆる、といへば、雨ぞいと増りぬるをといふ。いかにといへば、いでや旱天の雨は更なり草木の花咲みのるも、みなこの惠みにこそあんなれ。またその感情のふかきをいはゞ、けふは元日なりけりといふに、雨そぼふりて霞わたりたるは、實に春かなとぞおもふめる。師走のみそか、のどやかにふりたるも、春待がほにていとむかし。すべて春は雨こそのどかなれ、軒端より霞わたりて、いとこまやかにふきるが、衣うるほせども降とは見へず、軒の玉水も間遠に音して、すゞ捨し蜘のゐに玉ぬくけしき、庭の面のかれふの底に、みどりや

ゝそひ行も、柳の絲の動きもやらで露そふも、いとのどかなれ。ともし火かゝげても、何となくひかりしめりさるも、鐘のおとのほのかにひゞきくるも、心すみわたりぬる物ぞなし。其外梅が香のしめり夜ふかくにほひわたるも、花にうしとかこちぬるも、哀はありけり。春も老行ころ、蛙の時得がほにすだくもをかし。ほとゝぎすのはつねいなくまと思ふ頃、むら雨のはらはらとふり出たるも、五月雨のいく日も降くらして、ふみの巻く々くりかへしつゝ、居たれは、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心ちぞする。また暑さはたえかぬるころ、雲の漲り出る勢ひ有て、風一しきり吹おちたるに、柳蓮葉なんどの葉うら白く見せたるもすゞし。やがておほきやかなる雨の間遠におちたるが、後にはしきりにふり来く、物おとも聞ねど、土のにほひきたるもいと心よし。軒端は玉のすだれかけたらんやうに、玉水の絶間なく落たるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし、また水走らせたるに、人々ながし物いでて打守りゐたるもをかし。やゝ雲うすくなれば、池の面にはかぞふるばかり雨見えて、小鳥など庭へおどり出て餌拾ふさまをかし。はじめ雲の立出し方は、はや空の一あほみどりに見えて、虹なんど見ゆるに、木々のみどりは庭潦に影見ゆるも、いとすゞし。老たる女など、神のおとにおどろきて、はい出たるが、けふのは若かりし時のごと、よく晴にたり、今時のえかくはる、ことまれなり

なんど、そやくりごとといふもあり。かれ　あくあえてしなどいひて、かたみに笑ひどよみつゝ、けふは蚊も少なかるべし、神のおともいとかそけなり、その頃の暑さも忘れぬるとて、えしちかう出れば、夕月のひかりさしわたりて、草木の露も玉なすに、こゝへふくれたる蛙の、もの待がほに空打ならみて、ふつゝかなる音もなくなをゝし。秋くるころの雨は、きのふにかはりて、何となうさびし。荻の上風、外山の鹿音なんど、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞馴れし筧の水の音までも、哀ふかくころ、月れ前のむら雨も、またをかし。まいて、やゝ夜寒の頃、鳴からしたる虫のねの、雨のをやみにかすかなる声して、枕ちかく鳴よるも哀なり。この雨に木々も染なんと思へば、たけなども、おひいでなん、栗もえやおつべしなど、わらはべの物さびしげに、ともし火に向ひつゝ、いひ出るもおにさまざまなり。夜ふかき鐘の音の、打しめる物から、さすがに秋は声さえて聞ゆるなぞ、まつ夜こかきの思ひまでも、おもひ出かねつゝ、人の心をも哀れとおもふばかり、感情いとふかゝり。紅葉のそめそふも、白菊の移りゆきて、ひとさかり見するも、尾花の露重げに打しほれたるに、りうたんのうらみ深く咲たるあたりもつぎ〳〵に、朝がほのみ、なかれたる中に、さゝやかなるあかう咲出たるが、昼過るまでも、しぼみをくれたる、又あはれなり。野分の風は、おどおどしきものから、雨は夕立におとらざれど、さすがに哀をそふ

るは、秋のならひなるべし。しぐれの、さとをとして、夕日おもしろく降りくるも、またをとかゐて、枕をふるもをかし。月よりも、やみの夜よりも、哀れふかきものには侍らぞやさいへば、かうようにいひならべては、げにもといふべからんが、一とせもふるこゝちして、よみ見れば、この雨はおとつ日より降りいでしをと思ふ心にかはらじと、心のうちにおもいて聞ゐしも、またをかしかりけり。

○竹取翁物語講義　第四

琴條女史

これをみつけて、翁煙夜姫にいふやう、我子の、ほとけの變化の人とまをしながら、こゝらおほきさまで、養ひまつるこゝろざしおろかならず、翁の申さんこときゝたまひてんやといへば、

○これをみつけて云云　五人の者の深く心を込めて通ひ來るを翁見つけて、さて捨置きがたさに、姫に云々と告ぐるなり。○我が子の佛變化の人と云々　あやしく竹の中より出でたる故、佛變化の人といふ、尊みて我が子の佛といふとある解の説如何なり。のはがと同意の「てにをは」なるべし。我が子が生みの子にはあらずて、佛變化の人なりといひながら、といふ意にて、下の翁の申さんこと云々といふ處にかゝれる文なり。○こゝら　こゝらは物の數の多きをいふ、此處にては六層といふほどの意なり。○おろかならず　俗にいふ容易ならずといふこゝろなり。○きゝたまへてんや　てんはテアランにて將來に用ふる「てにをは」なり。聞きたまはむやと解してよし。

大意ハ、五人ノ者ガ思ヒ込ンデ通ツテ來ルノヲ翁ガ見付ケテ、赫夜姫ニイフニハ、アナタガ我ガ生ミノ子デハナクテ、世間並(せけんなみ)ミノ人トハ違ヒ、佛ノ變化ノお方(かた)ダトハ申シナガラ、此ノ翁ガ此(こ)ンナニ大層大キクナルマデお育(そだ)テ申シタ志トイフモノハ、中々愚(おろか)ナ事デハアリマセン(カラソレヲ恩ニシテイフデハナイガ)翁ノイフ事ヲ聽イテハ下サルマイカトイフト、、、、、、、

かくや姫、何事(なにごと)をかのたまはむことを承はらざらむ、變化(へんげ)のものにてはべりけむ身ともしらず、親とこそ思ひ奉れ、といへば、翁うれしくものたまふものかな、といふ、

此(これ)は赫夜姫の答なり、○變化のものにて云々　變化の者なりしことなどは更に覺えず、實の子と思ひ居れりとなり　○翁うれしくも云々　翁の答にて、うれしくもいふ姫が直に承諾したるを喜べるなり。

大意ハ、姫ノ答ヘテイフノニハ、アナタノ仰(あほ)セラルヽ事ヲ、ドンナ事ダカラトテお聞キ申サナイ事ガアリマセウカ、必ズ仰セニ從ヒマス、私ハ自分ガ佛ノ變化ノ者ダトモ知ラズ、アナタガ本(まこと)ノ親ダトバカリ思ツテ居マス、トイフト、翁ガ、アーヨク聞キ入レテ下サツタ、マー嬉レイト言ツタ。

翁年七十にあまりぬ、今日(けふ)とも明日(あす)ともしらず、此世の人は、男(をのこ)は女(をうな)にあふことをす、女は男にあふことをす、其の後なん門(かど)もひろくなりはべる、いかでかさることなくてはおましまさむ、

翁年七十にあまりぬ　此は翁がふたゝび語りかけたることばなり　○けふとも明日ともしらず　今日とも明日とも知らぬ命(いのち)なりといふ意なり。○此世の人は云々かくや姫は竹の中より出でたる變化なれば、殊更にことわれるなり。○男は女にあふことをす女は男にあふことをも　此の二句重複の樣なれども、一は男を主としていひ、一は女を主としていひたるなれば、二つありて宜し、然るに下の一句を小字にして本文には記(しる)されども、しひて省(はぶ)かんとならば、上なるをこそ省くべき。

あふとは交合をすることをいへるなり　○門も廣くなりもべる子孫繁殖して其の家さかへ行くをいふなり。　○いかでかさることなくておはさむ　さることとは男女相合ふことなり、此は男にあふべしとかくや姫にすゝむるなり。

大意ハ、ソコデ又翁ガイフニハ、翁モハヤ七十餘リノ年デスカラ今日明日モワカラナイ命デアリマス、夫故申シマスガ、此ノ世ノ人ハ男ハ女ニ合ヒ、女ハ男ニ合フノガ常法デアルノニ、ドウシテアナタモ然ウセズニ御出デナサレウヤ、然ウナサイマセ

赫夜姫のいはく、なでふさることのたまふべからん、といへば、變化の人といふとも、女の身もちたまへり、翁のあらむ限りは、かうてもいますかりなむかし、此の人々の年月を經てかうのみいましつゝ、のたまふことを思定めて、ひとり〳〵にあひ奉りたまへね、といへば、

かくや姫のいはく　此は又かくやひめの答なり　○なでふは何とての意にて俗にどうしてといふ義なり。　○翁のあらむ限り　此世に存生して居る間なり。　○かうても　斯くてもの音便なり。　○いますかりなむかし　いますかるはいまぞかるともいふ　おはすといふに同じかしはぞよといふ程の意をもてる「てにをは」なり、此處には殊に輕く用ゐたり、　○かうのみいましつゝ　斯程迄に思をかけて居玉ひてといふ意なり。　○此人々　五人の者どもをいふ　○ひとり〳〵に　一人毎にといふ意にはあらで、多くの中にて誰なりとも一人といふ義なり、今は耳遠けれども古へはかくいひしなり。

大意は、かくやひめガ、ドウシテ〳〵、私ガ左樣ナヿヲ致シマセウ、トイフト、翁ガイフニハ、變化ノ方トハイヒナガラ、現在女ノ身ヲ持ツテ入ラツシヤルニ、翁ガ存生シテ居ル中ハ兎モ角モ、斯ノ儘ニテお出デナサラウガ(今日明日モ知ラヌ翁ガ命)翁ナクナツタ後マデ、斯ウシテお出デナサルヿガ出來マセウヤ、夫ダカラ此方々ガ年月久シク斯程マデニ思ヲカケテお出デ

ナスツテ、彼此ト色々ニオッシヤルノヲ聞キ別ケ、誰ナリトモ思ヒ定メテ、此ノ方々ノ中一人ニ合ツテお上ゲナサイトイウト、　（つゞく）

小説

○吉野川

鴨立庵主人

第二　思を運ぶ渡し舟

三冬嚴寒の候なれども、今日の日和は別にして、陰雲天を蔽はず、氷雪地を埋めず、また北風の膚を劈くなく、天つみ空に出御ましたる金帝の龍顔殊に麗はしく、御惠の厚きには、艱苦を堪ふる窓の梅も、聊憂さを慰むべく、雪に鎖ざゝれたる深山の鶯も、谷の戸出づる用意やすらん。實に冬ながら春心地せらるゝばかりなり。

書齋にして客間を兼ねたらんと覺しき、少かなる奥の一間に、ボンヤリとして唯ひとり坐し居るは、前回に於いて——牛込八幡町に於いて、昨夜讀者諸君に見えたる山本靜なり。　室は左まで美麗に粧飾されざれども、然りとて見苦しといふほどにもあらず。正面の床の間には、さる者の筆に成りさると覺しき一幅の畫幅を掛け、傍なる棚には、文

箱三箇ばかりと并べ、床の前には、朱塗の唐机を据えたり。其の上には、硯箱一個と書籍五六冊とを載せ、外に一封の書状あり。窓より差入る、日光を背負ひて暖を取りながら、机の前に坐を占め居たる靜は、しばし机上を眺め居たるが、やがて彼の書状を取上げ、繰開けて讀下し讀了りて下に置きし、さて二本の臂を用て頬杖となし、其の身をば机に持たせぬ。机に持たせたるまゝ、目を瞑りて身動きだにせず。目を瞑りたるは睡魔に犯されたるか、冬の長夜を熟睡して最早眠き譯はなし、されば何か深き物思ひに沈めるなるべし。

折しも靜の妹なる小女は、襖を開けて用事ありげに入來りしが、かたへに坐して「兄さん今日は好いお天氣ですね、どちらへかお遊びに入らつしやいませんか。エ兄さん……」靜は(口やかましき者)といふ代名詞を母より附與せられたる、さしも口やかましき靜は、一向頓着する氣色もなく、振向きもせず、一言のいらへだにせず。小女は尚ほ何事か話しかけたる風情なりしが、此の有状に呆れやしけん、氣味わるさうに立上り、恐ろしさうに出去りたり。後に靜は唯ひとり、尚も思案に呉れたる様子なり、今靜の心中果して何事をか考へ居る試に想像を下せば、「ハテ……氣にかゝるは昨夜なる歌…………忘られがたき種なれや……互にしげる思ひ草……思ひ草……シテ見ると思ひ草の

種を蒔いたのかしらん　何時蒔いたらうか……何處へ蒔いたらうう……マサカ……ダが巳れの事をマンザラ…………」

静の眼中には、窓内より首を出してほのかに其の姿を示したる美人現ぜり。　静の耳朶には、窓内に妙音を發して愁人の心を亂したる琴聲響けり。　心其の像を設け、其の聲を作りて、目之を見、耳之を聞く、静の身体は正に書齋の中にありながら、心魂は方に杉垣の邊に遊べり、くゞり門の傍に佇めり。　静は實に昨夜の物思ひを繰り返せるなり。

暫くにして静は醉の醒めたる如く、夢の寤めたるごとく、目を見開き、手を拱き、又も机上の書状に目を注ぎ、しばし見つめ居たるが、「ハテナ」又暫くして、「フ、ン」とかすかなる笑をあらはせり。　さるにても静が昨夜来斯く物思ふに沈めるは何の故ぞ。　昨夜はじめて花顔を見たる爲にはあらざるべし、不斗妙音を聞きたる爲めにはあらざるべし、乃ち昨夜花顔を見、妙音を聞きて、はじめて思ひ草を生ぜしにはあらざるべし。　アー静は何故に斯くまで……　それには此の書状――書状を見て憂へ、書状を見て考へ、書状を見て喜ぶ。　實に此の書状――今朝静が受取りたる書状――先刻開き見たる書状――今また三たび目を注ぎたる此書状こそ……　今や此の書状は、讀者の注意が凝集せる燒點なるべし。　机の上に開げたる儘なるを、幸に作者は障子の隙よりかいまみて知る

おとを得たり

拝啓。豫て御相談申置候一條、愈々江東中村樓に於いて集會を催ふすことに決定致し、明日午後二時より開會可致候間、其の御用意にて該時限までに會場へ向け御來車有之度、此段御報知申上候也。

十二月三日

宮島秋太郎

山本静殿

併しながら他聞を憚る秘密の用事と見え、右の如くいと簡單に、いと曖昧に記したり。如何なる用事の書状なるか、將何が爲めに如何なる集會を開くものか、毫も知るに由なし。因りて作者は尚委しく探索して其の顛末を知るを得たり。

矢張静岡縣の士族にて宮島秋太郎と呼ぶものあり。先年法科大學の業を卒へて、今は神田邊の或る法學校の講師たり。年は廿の上を五越したれども、思ふ旨ありて未だ妻を迎へず、父母と共に暮し居れり。山本とは勿論朋友なれども、東京に出でゝよりの知己にはあらず、同縣同郷にして、小學校よりの旧知己なり。而して宮島は一人の同胞をも有せざれば、山本とは殊に親しく交りて、互に如何なることをも包みかくすことなく語合へり。されば山本が彼の婦人に思をかけ居ることも、宮島は疾くより之を知れり。

而して宮島は彼の婦人とも互に知れる中なるぞ不思議なる。筆の序なれば婦人の素生をも此に記すべし

山本が思を掛けたる婦人は名を光子と呼び、川村左近なるもの、娘、一人の兄あるが、これは現に某會社の役員たり。左近は旧長州山口の藩士なりしが、維新後東京に移り住みて光子を擧げたり。光子は生れつきさへ敏かりしに、母の教へや善かりけん、裁縫をはじめとして、女子の爲すべき業は何一ツ達せぬことなく、殊に性質順良にしてよく父母に事へければ、父母も此上なく之を愛せり。今年十八の齢を重ねたるが、容顔いとも艶やかにして、色白く、目元清しく、鼻筋通り、口元愛らしく、などいふ普通の形容語を用ゐたらんには、徒に此の婦人の品格を下すに足るのみ、實に花にも月にも類ふべからず、唯美……アー此の美孃子……山本が物思に沈める亦宜ならずや。

山本および光子の兩人は、未一面の識なけれども、山本は屢光子を見たり、又よく其の氣質をも知れり、其才能をも知れり。能く之を知りてこれに戀慕したるなり、之に戀慕して同穴の契を望みたるなり。光子は未よく山本を知らず、如何なる素生の人か、如何なる氣質の人か、毫も之を知らず、されども之をかいまみたるのみにして、餘り惡しとも思ひ居らぬなり。宮島はよく山本が心中を知れる故に、自其の媒妁となりて、能くま

でも力を盡し、山本が爲めに周旋せんと勉めたり。此に於いてか集會を開かんと思ひたちたるなり。此の集會は如何なる集會か、通常一般の宴會にもあらず、さりとて舞踏夜會の類にもあらず、近頃稀れに行はるゝ、或は絲竹を弄び、或は文學を論じ詩歌を談じて、快を取り益を得る(といふ)紳士淑女の小會なり。宮島は婦人社會にも交際あれば、自ら幹事となりて此の會を催ふし、それに托して山本と光子とを引合せんとしたるなり。さてこそ彼の書狀は、此の會の場所と時刻とを報じたるものと思ひ合されされ。

時に下女の聲として、

「旦那樣御膳を召上りませ。」

山本靜は徐ろに立ち、書狀を收め晝食を了つて、兎角する程に時計の針はやすみなく、そや彼の時刻に近づけれぱ、直ちに出立の用意をなしぬ。

○教育小說　劣夫傑女譚　(接第三號)

ペスタロッチ原著
山縣悌三郎重譯

第三回　惡漢の深たくみ
百性の髙ものがたり

村長は日暮るゝまで家に歸らざりたるが、歸り見れば常には燈の光燦爛として酒飲

み醉ひ狂ふもの、聲喧しきに、此夜に限りて火光射す室もなく、闃然としてありければ驚きて走り入れど、内には絶えて人影なく、唯室の片隅に妻の伏して泣き居たるのみ。村長が歸り來し足音聞きて、

「良人歸らせ給ひしか、今日は如何なる惡日ぞ、如何なれば妾夫婦は斯く幸福の竭きたるや、妾等が敵は皆喜びて勝誇り、又村人等は一人として我店に來て酒飮むものなし。」

フムメルは憤懣に堪えざりければ、夜もすがら寐もやらず、如何にして此腹癒せんと、千々に心を碎きけるが、翌朝になりて思ひ見れば、領主に逆ひて危ふき事を爲さんよりは、腸は左あらぬ體にもてなし、事の成り行きを見ることぞ好けれと、漸くに心を定め、窓推し開けて打ち眺め、いと快げに肉笛吹くを隣家に住ふフリッツと云へる者聞き着けて言を交し、「村長どの早晨より元氣好きは、早客人の來りしか。」

フムメルはブランジーを鍾子に注ぎて窓より呈出し、「客人等は今に來ぬべし、フリッツ、足下は我が健康を祝ひて一盃傾けよや。」

フリッツ「其はまだ餘りに早かり、後ほど飮徒の集る頃往きて接伴に與らん。」

村長「足下は毎も調諧が得意なり、昨日の一件は左ほど惡き事にもあらねど、足下は如何思ふや、一たび空に羽を展すも、再び降り來ぬことなし」是はアル子ルが今こそ威勢

盛んなれども、久しからずして衰ふべしと暗に誹れるなり。

フリッツ「其は我が知る所にあらず、されど我が心に思ふ鳥は、随分長く飛びたれバ、今は落ち来る時分なり。但君がいふ鳥と、我が思ふ鳥と、鳥違ひなるか、我は得知らず。朝餉の調ひたりと家内の者の呼び候ふ、恕したまへ」と言ひすてつ、フリッツは窓の戸を礑と閉ち、忽ち内に入りにける。村長も茫然として、隣人までが面りに我を謗れる腹立しさ、口惜しさと呟くのみ、復た爲ん術もあらざりけり。

暫くして村長は心に浮むこともやありけん、理髪所へと趣きけるが、途中にてニッケル、スピッツといへるものに出で遇ひさり。

ニッケル、スピッツ「是は村長どの、日曜日の鮮衣着て何所へ往きたまふや。」

村長「理髪所までまいるなり。」

ニッケル、スペッツ「土曜日の朝から君の暇あるとは、いとめづらしきことならずや。」

村長「是は實にめづらし、年中個様に暇にても耐えらるべきや、其は先づおきて是より我と一所に行きね、酒もあらん、可喜可笑しきこともあらん、いざ行かむや。」

ニッケル、スピッツ「理髪所にて酒飲みたらむ、貴殿が賠錢は誰がするぞ、理髪所より徴取てられん、あなおかしや。」

村長「我とて左までに慾ふかゝらず、我が酒店の免許をも没取んとするものあれど、是は近きことにはあらざるべし。」

ニッケル、スピッツ「そは左もあらん、されど新しき領主は、祖父なる前の領主といたく宗旨の變りたれば、貴殿の爲めには運惡しかり、宗儀十二ヶ條の其中にて、一ツとして前の領主と今の領主と心合ひたるはなかるべし。」

フムメル「然なり〳〵、先主の宗旨は我が心に稱ひたり。」

ニッケル、スピッツ「我も亦しか思へり、先づ其第一條は、村長よ、我汝を信ずるなりといふにてあらん。」

フムメル「好し〳〵、その次は。」

ニツケル「われ爭て知り得んや、今推量をもていふときは、村長よ、我汝より外に生くる人の言とへ真と思はずと、先づ斯様なものにてあらん。」

フムメル「ニツケル、足下は僧侶にあらず善かりしものを、然あらば新らしき十二ヶ條の心得を定めて村人に教へたらんを、遺憾なことしたり。」

ニツケル「村人等が我と僧侶になしおかんや、我一たび僧侶にあらば、教ふることの知り易く解り易くて、小兒の心にも明かなれば、別に教を司どる僧侶も要なく、われ忽ちに

免職されん。」

フムメル「宗旨に限らず、萬の事舊きを守るが上策なれ、變更りたりとて何程の利益かあるべき、我ら一身に上にていへど、今の主人も敢て畏ろしき人とも思はぬぞ。」

ニツケル「されど貴殿の幸運は、去年先の主人を葬る時、倶に地下に埋めたれば、夫より後は餘りに好事のありとも覺えず。」

フムメル「我は永らく好き造化の續きたれば、今更少しく逆ひ風にありたりとて、敢て恨むることにはあらず。」

ニツケル「貴公も久しく幸福なりし、されど真の運にはあらで、一に金の威光なり、書記といひ和尚といひ、孰れも貴公に負債あれば、如何で貴公の爲惡しかれと謀らんや。」

フムメル「何事いふぞ、足下は能くも知り得ぬことを。」

ニツケル「我が知れる事は尚ほ多かり、我は貴公がルーチーの父を欺きたる秘密を知れり、ルーギーの父が代言師を打ち語らふと側聽せんとて、窓の外なる大小屋の側に積める藁の上にて、貴公の臥居たるを認め置きたり。貴公は那の夜二時頃まで彼處にありて竊聞きし、それより書記と語らひて、證據物を替へたるならずや。」

フムメル「足下がいふ事は一つとして真實ならず、虚言にも程のあり。」

ニツケル「我が言の眞實ならぬとや、若し彼の時に書記が法廷にて貴公の證據を變へざらむ、ルーヂーは今尚ほ彼の牧場を有てるならん、又ヴヰスト　カイバッヘルの兩人も虛事をば誓ふまじ。」

フムメル「何は措きつ、彼の一件にて我が訴訟に勝ちしは最と好かりき、足下も我れ負けたりと聞かば、餘りに快しとは思ふまじ。」

ニツケルは「然なり」と應へ「貴公が公事に勝ちし事も、又如何にして勝ちしやも、我能く知れり」といひつゝ、別れを告げて去りにけり。

村長は理髮所へ行きて看るに、多數の村人早や集りて、樣々の物語りせる最中なり。村長は常にも似ず、いと懇に挨拶なして坐に就けば、百姓輩は平生ほどに頭を下げず、物言ひざまも恭しからず、村長を尊ぶ態のあらざれば、村長は之を見て小僮を馳らせ、我家より葡萄酒を齎ち來らせ、又卷煙草を多く裝めたる煙草嚢を机の上に置きて、頻に薦めける程に、煙草の煙濛々と雲の如くに起ち昇り、硝子盃の觸るゝ音珍々として鈴に似たり。村人等は皆打ち興じつゝ、フムメルを惡み嫌へる心も頓に消え失せたり。村長は豫め妻と示し合せ、酒の中に硫黄を雜ぜさせ、己が用ふる瓶には水を容れ、色を着けて葡萄酒の如くに見せしめたりやがて村人等が酒の廻りて、頭の熱せし頃を計り、村長は

巧に話を轉へて、人民の權利は重きものなるを、上なる人の常に侵し破りなど評論し、又領主アルチルが、酒店料理屋の營業を禁じ、己が手に握るときは、酒類の價忽ちに騰るべしなど、說を構へて領主を誹り、窃に村人等の心を煽動しけり

斯くて村人等は領主を壓制なりとして種々に誹り罵り、聲高くがや〳〵とおち噪ぎける折に、一人の醉漢が村長の臂の邊に置きたる瓶を覆せむ、理髮所に犬馳せ來りて床にこぼれたるを甜めたり。村人等は之を見て驚き異しみ、犬の酒を飮むは怪事なりとて撿め見るに、酒にはあらで色着の水なりたり。村人等はフムメルに欺かれたりとて叫び狂ふも多ければ、理髮所の主人は斯くと見て、如何なる過誤のあらんも知れず、家の器具など打ち毀はされなば、償ひもならぬ損失なりと思ふものから、強ひて醉漢等を戶の外に逐出しぬ。村長は之を見て憤りつゝ、一座の者を我が家に招きけれども、二三人の取り得もなき懶惰漢等が從ひ行くのみ、其他は絕えて招きに應ずるものなし。村長は跟き來りたるものゝ內一人を遣はして、泥工丁奈度が弟子なりけるヂョーセフといふものを呼ばせけるが、間もなく村長が許に來りけり。

村長「是はヂョーセフ善くこそ來たれ、足下の師匠は足下が爰に來つるを知りたるか。」

ヂョーセフ「否吾が師は今日御城に參りて午時までは還り來ず、されば一時に工事場

ふかへりなば、少時も課業を欠きたりと覺らるゝことはあらず。」
村長は「ろは心安かり」とてヂョーセフを導きて次の室に入り、戸鎖をなしけり、机の上には豚の肉、肉糕、麪包、葡萄酒など置き排べたり。村長はヂョーセフに向ひ「いざヂョーセフ快く一杯を傾けて此肉糕を試みよ、別に肴はあらざれど、辭儀なしに飲むこそよれけ、師匠の家に在りては、隨分苦しき日も多からん。」
ヂョーセフ「貴命の如くに候へど、主人も今より工事にありつきたれば、萬の事樂になり候はん。」
村長「足下は思ふにも似ぬ愚なる人かな、彼の工事なりとて何時迄か續くべき、了奈度は未だ大建築を請負ひし事なければ、此度の普請には適せぬ人なり、されば萬足下を頼みとなすべし、我是に由りて足下に相談したき一議あり、受け引かれんや、如何ふるや。」
ヂョーセフ「何事なれ命ぜられよ、村長どの、是は君の壽を祝ひて飲み候はん。」
村長は再び皿に肉糕を盛りてヂョーセフに與へ、さていへるやう「若し會堂の礎を築くにヨシユウヱンヂ石坑より出づる石を用ひられなば、我は此上なき幸と思ふべし。」
ヂョーセフ「是は村長どの、何事を曰ふぞ、石の事は辨へられじと思ひたり、此石を礎となしたらんには、何の用にも立つまじきを。」

村長「我はさばかり惡しと思はず、シユウヰンヂの石は種々の事に用ゐるなり、爾用ひたるを我また見たり、若し此石坑を用ひなば、我いと辱しと思ふべし。」

ヂョーセフ「されど此石もて造りなば、壁は六年にて朽ち果てん。」

村長「そは皆據なき虚事なり、又よしや會堂の壁が今より十年の間堅牢なればとて、朽ち傾くばとて、そは足下の預かることにはあらず、唯我がいふ如く爲し給へ、足下が身の爲め好きことあらん。」

ヂョーセフ「されど領主が此石は物の用に立たずと覺りたまはむ如何にせん、アルネル主は人の思はぬ事をも知りたまふこといと多かり。」

村長「愚なることをいふものかな、領主が何とて石の良否を見分け得んや、唯我がいふ事を受け引かれよ、若し足下の師匠が此石坑より石を取らば、我足下に五ターレルの金を贈らん。」

是にて双方手を打ちて約束整ひければ、村長重ねていひけるは「今一ツ足下に托みたきことあり、近頃藥舖より得たる一嚢の藥あり、之を石灰に雜へ用ふるときは、漆灰の堅く壁に付くこと鐵もて造れるに異ならずといへり、されど我家に之を用ふる前に、一たび他の家に試みんと思ふなり。」

ギドーセフ「其も承知いたしたり、近隣の家に工事あれば、其序に家の隅に用ひ試み候はん。」

村長否々「ギョーセフ其にては試しにならぬ、會堂の塔に用ふることはなるまじきや。」

ギョーセフ「石灰よりは多くその藥を混ぜべきにや。」

村長「一樽に二ポンドばかりと我は思へり。」

ギョーセフ「それはいと易き業にてあり。」

村長「足下我が爲めに必ず此藥を試み用ひんか。」

ギョーセフ「必ず爲し得ん」

村長「して若し過ちあるも他言はすまじ。」

ギョーセフ「勿論他言はなさず、又過ちもあるべからず。」

村長「さらば入用なるときは藥を取りに來るべし、今一盃を傾けぬや。」

ギョーセフは「委細承諾いたしたり、さらば村長どの、健康を祝ひ申さん」といひつゝ、別れの大盃を唯一口に飲み乾したり。

批評

○日本華文（中本一冊二百四十四頁大阪東區備後町四丁目三十一番地梅原嚶嚶室發兌）

吾人は曾て出版月評に於て、宮崎三昧氏の雨月物語僧西行謁白峯陵條の評を見ました、其讀書の眼光の高さと、其批評の謹嚴にして面白きに感服しました、今又氏の此著に接して更に感服の度を高めました。其緒言に、

支那には講文の法あり、西洋には華文の術あり、獨り日本の文章には、僅に詞の法のみありて、妙處を指示すべき法なし。法なきには非ず、法は無法の中にあれど、明かに名目を附して、文の眉目を鮮明にすべきものもなきなり。往時葛西因是が源氏物語の雨夜のしなさだめの巻、及び國姓爺合戰の浄瑠璃を評し、又森田節齋の浄瑠璃本を評したるが如きは、日本文の妙所を抉出したるに庶幾し。近頃先輩依田學海翁亦國華餘韞新評戯曲等の著ありし。皆力を此に用ゐられざるものなり。予も亦竊に文を好み讀むに随ひて評隲したるもの數篇あり、今又數篇を加へて一冊となし、日本華文といふ名を冠らせて世に問ふ事となりぬ。されど元々自家の樂みの爲にせしものなれば、中には穿に過ぎたるもあらん疎鹵なるも多からん作者をしく知る所あらしめむ、隨分迷惑に思ふ事もあるべけれど、又時としては口を開いて莞爾たる處もなきにはあらざるべし。云々

とありまをが、是で已に氏が文學ヿ熱心あると、又本書の價値が解りましやう。而て吾人は喜んで全篇を通讀しましたが、矢張彼の雨月物語僧西行白峯の陵に謁する條の評が一ぱん面白い様でも。併し此一篇ヿ就きましては、本社の鐵筆將軍が以前ヿ鳥渡書いたものがありますから、御目にかけます。勿論漢文でありましたのでをが、讀者の便を許りて普通文とし、且つ普通文にするヿ就き幾分か直した處がありまを。」

源平盛衰記僧西行謁白峯陵條　　鐵筆將軍

乃者兩窓無聊、近刊ノ出版月評ヲ獲、之ヲ讀ム、中ニ宮崎三昧氏ノ上田秋成著ス所、雨月物語僧西行白峯ノ陵ニ謁スル一節ヲ評スルモノアリ。發蘊抉奥、解剖微ニ入リ、鑿々誦ス可シ、而シテ其序ニ曰ク、老友依田學海曲亭馬琴著ス所、椿說弓張月源爲朝白峯ノ陵ニ謁スル一節ヲ評シ、賞揚措カズ、然レ𪜈此一篇ノ文字、元ヨリ馬琴ノ創製ニ係ルニ非ズ、實ニ粉本ヲ秋成ノ雨月物語ニ取ル、今之ヲ評スルニ雨月ニ於テセズ、而メ弓張月ニ於テス、未本ヲ捐テ末ニ趨ルノ譏ヲ免カレズ焉ト。眞ニ然リ眞ニ然リ然リト雖𪜈、氏既ニ弓張月ノ粉本ヲ雨月ニ取ルヲ知リ、未ダ雨月ノ粉本ヲ源平盛衰記ニ取ルヲ知ラズ、豈亦本ヲ捨テ末ニ趨ルノ譏ヲ免カレン、彼ノ前節ト相關セズ、愴涼嗚咽、一種異樣文字、是靈祭哥ヲ出シ、人ヲシテ喫驚セシムルノ字文ナラズ、正ニ是幽渺淸迥、讀者ヲシ

テ低徊玩味置ク能ハサラシムルノ文字等ノ名譽牌的ノ評語ハ、固ヨリ之ヲ弓張月ニ附スルヲ得ズ、而テ又之ヲ雨月ノ巻上ニ置クヲ得ズ、宜シク之ヲ移シテ盛衰記ニ贈與スベキ也。

誰カ盛衰記ノ文章ノ靈敏快活、讀者ヲシテ悲喜交臻リ、感嘆並發セシムルヲ知ラザラン哉。然レ圧依田宮崎二先輩、尚此源泉ヲ忘レテ彼ノ支流ニ就ク、況シヤ今日年少學生唯喜ンデ近刊半文小説ヲ誦シ、這般好文字ヲ味フヲ知ラズ。想フニ是所謂未食ハズシテ厭棄スルモノ也耳余乃チ不文ヲ顧ミズ、其一節ヲ評シ、以テ大平ノ一臠ヲ此輩ニ示シ、併セテ教ヲ依田宮崎二先輩ニ乞フト云。

鳥羽院の北面并、佐藤兵衛尉義清と云し者、道心を發し出家入道して西行法師と云けるが大法房圓意と改名して、去仁安二年の冬の比、諸國修行しけるが、中比のすき者にて東は壷の石、歩夷が島、西は金の御崎、松浦の沖、名所舊蹟の歌枕を歩み、見ぬ處はなかりけり。不破の關屋に留りては、月には雲のフハと云。武藏野を過るとては、柏木の葉守の神を恨みたり。實方中將の墓にては、一村薄を悲み、白川の關にありては、關屋の柱に筆を止む。四國の方の修行を思立ちけるときは、江口の妙に宿をかり、假の宿と讀みしかば、心とむなと返しつ、一夜の宿をぞ借りあける。(雨月物語、流麗ノ語ヲ以テ。東海ヨリ奥羽、奥州ヨリ東山、而テ難波、而テ須磨明石等、西行ノ遊

跡諸勝ヲ叙ス、少ク此一段ヲ變スルニ過ザル也、而テ其流麗ノ語ハ、此快暢ノ句ニ及バザル歟等。）讃岐國へ入て、松山の津といふ所に行ぬ。こゝは新院流されてわたらせ給ひける所ぞかしと思出し、昔戀しく尋ねまゐらせたれども、其御あともなかりければ、龍顔奉公の古より、鸞王歸依の今までも、御事忝く哀れに覺えければ（未凄涼ノ景ヲ寫サズ、先懐古ノ情ヲ描キ、以テ後段幾多悲哀ノ語ヲ襯托ス、極テ法度有リ。）「松山の浪に流れてこし舟の、やがてむなしくなりにけるかな」と打詠て、支度といふ山寺に遷らせたまひても、年ひさしくなりければ、御跡なきも理におぼえて、御墓はいづくなると問ひたれば（天子ノ御陵、何レノ處ニ在ルヲ知ラズ、一問已ニ血涙ヲ見ル。）白峯といふ山寺と聞て、尋ね參りたりけるに、あやしの下臈の墓よりも猶草繁し（匹夫ノ墓、尚掃洒一草ヲ止メズ、天子ノ陵、却テ葎芽簇々、讀ミ去テ感慨無限。○荒涼ノ景様、凄愴ノ光景、雋句中ニ躍如タリ、彼ノ雨月物語ノ、松柏陰翳、晴天猶雨ルカト疑フ等ノ語ト比セバ、果レテ如何。）いかなる前世の御宿業にかといと悲し。昔は清凉紫宸の玉臺に、四海の主とかしづかれましませしに、今は民村白屋の外土に、八重の葎に埋れたまへる事、御心うきことなれども（宮崎氏雨月ノ此段ヲ評シテ曰ク、其盛衰ヲ稱シ、其得意ヲ寫シ、忽チ折レテ崩後荒凉ノ光景ニ入リ來ル、何等ノ筆力ゾ、何等ノ自在ゾト、然レモ彼此並誦、細カニ其眞味ヲ咀嚼スレバ、雨月ノ此篇ヲ學ブ明々ナルヲ見ル可シ。）翠帳紅閨の中に三千の君と仰がれ、龍樓鳳闕の上に二八の臣とあがめられて、辯才世にかまびすしく、威勢朝に振ひし人々も、名ばかり留る世の習、咸陽宮も徒に片々たる煙と昇り、姑蘇臺も空しく瀼々たる露繁し。宮も藁屋もはてしなし、兎ても角ても世の中は唯かげろうの假の宿、すみはつまじき所なりとて、（長句短句、滑落トシテ珠ノ水晶盤ニ躍ルガ如シ、而テ悲壯淋漓 卒讀ニ堪ヘズ。○馬琴押佛説、一抑三界ノ火宅ヲ出テ、九品ノ淨土ニ至ル云々ノ語ヲ附ス。亦此傷心ノ一節ヲ減殺セシニ過ギズ。）松

樹千年終是朽、槿花一日自成榮と詠じつゝ、暫くこゝに候ひたれども、（悄然悵立ノ狀睹ルが如シ。）法華三昧つとむる住持の僧もなく、燒香散華を奉る參詣の者もなかりたり。（雨月ノ奉仕ノ臣僚ナキ等傷心ノ語亦此篇ヨリ得來ル者而テ彼レハ數十言唯無諸者ヲ寫シ此レハ隻句措キテ無給僧ニ及ブ其優劣固ヨリ識者ノ甄別ヲ要セズ）いと物さびしかりたれば、「よしや君、むかしの玉の床とても、かゝらんのちは何にかはせん」と讀みける。彼の延喜の聖主が、「いふならく、奈落の底に入ぬれば、刹利も首陀もかはらざりけり」と申す御歌に思合せて哀れなり。さても七箇日逗留して、花を手向け、香を燒き、經念佛して、「聖靈決定往生極樂と回向し奉て立ちけるが、御廟の傍に松の有ける本を削り、無らん時の形見にもとて、二首の歌をぞ書付たる「久しさに、經て我後の世をとへよ、松跡しのぶべき人もなき身ぞ」「こゝを又、我住うくてうかれなば、松は獨りにならんとやする。」と書注してぞ出にける。』

餘り長くなりますから、此位にして切りましやう、實は尚ほ引續いて盛衰記の讚岐院の事といふ一篇を評し、雨月の新院西行問答の處は全くこれから出たのだと斷言してありますのですが。

○お八重（小本一冊百七十三頁定價三十五錢 東京日本橋區本町金港堂發行）

本書は石橋忍月君の著述で、其の意匠は男女地位心情の相關相違を寫すにあるんださうで、以前に少し女學雜誌に載せられたものです。著者の自序で見れば、一生懸命有りだけの脳味噌を絞り出して漆めあげた小説、一行書いては手砲が鳴り、二行書いては入相の鐘、三枚四枚に一週日、一回二回に一月を費しなど、ありますから、是ぞ忍月君が精一むいまつくられたものに相違ございません、併しそれにしては餘りに………。偖以前には三年か、つた著述も一夜づくりとか、咄嗟の作とかいつたのが、美妙齋一たび蝴蝶に於て正實にいれてより、忽ち又一つの流行となり、其實一夜作りの咄嗟の著述も、苦心して幾年もか、つた様にふれる風となりました、それは或人の惡口、吾人の口から出たものではありません。其はさておき、本書の文章は如何にといふに、餘程風の變つたもの、言文一致の様で言文一致でなく、雅俗折衷の様で又雅俗折衷でもありません。多分彼の鵺体の妙境、以木接竹体の上乘なるものでせう。唯……と——と澤山お用ゐにならなかつたのは、此節柄實に御卓見、併し其僅かに用ゐられた處、往々間違つて居るのは惜しいことです。而て又地の文章の中に、(看客曰く沼津の段そツくりだぜ)五丁とか、(此節小說のお定り文句だヨ)三十一丁とゝの如く、大層に洒落られた所あれども、ツマリ是はない方が善いのです。　其他意味の通ぜざる文字、假名違等も澤山ある様に見受けま

しさ。

脚色は如何かといふに、文章から又た數等下つて居ります。お八重と新一は邂逅、實にむりこじつけとほか思はれません、新一は已に小名濱といふ名字の世間に甚だ尠いのを知り、而てお八重が小名濱といふのをも知り、其上久しく交際つて居ながら、一度もお八重に對して其素性を聞かなかつたとは、偖も隨分奇妙ではありませんか。殊に八重が波之助と同居して居るうちなどは、如何なる人でも――行衛知れざる妹を探しつゝあらざる人でも、鳥渡其身の上を聞いて見たいではありませんか。而てお八重竪から見ても横から見ても、表から見ても裏から見ても、將た正面から見ても側面から見ても、實に解りかぬる婦人、初めには情の奴隷、大恩受けたる波之助を戀慕して居る、而て又已に郎の花園には既定の花、郎の塒を作つてゐると知りながら、妾は是れ踏返された野邊の花、ゆかしき香もなければ尋ぬる蝶もあらじ、恵の露もなければ萎れ果つべしと嘆ちて居る、シカモ「ホ、、、でも中にゐらツしやる姫御前が、お龜かお化の樣では」など、言つて居る、鐵面皮も又「モウ寡婦になるのはいやでムいます」と言つて居る、實に比類なき情の奴隷。而て終りには忽ち理の奴隷、あれ程までの情の奴隷が、一通の郵書を見て、嗚呼吾は今より總て戀慕より生ぜる所の歡と樂とを棄てねばならぬ、身を其境

外に置かねばならぬと決心した、戀慕とは遠く距りたる淨土の彼岸に身を入れねばならぬ、是空の彼岸に身を入れねばならぬと決心した、シテ飄然として遠遯した、實に遠遯、さやかき月の夜をもさやけき調べをも爲さずに。まことに比類なき理の奴隷。嗚呼前半は情、後半は理劃然と際立つて居ます。而て又前篇に現はれ居る人物、悉く俗の俗なるもの、モ少し高尚の空氣を吹き込みたいものです。最後にまた言はねばならぬ事があります、それは第二回の結構、お八重が難に遭ふ事、波之助が之を救ふ事、實につくりものらしく、赤本の神髓を得たる拙し方、全篇十餘回、一回として非難の入れ處のないのはありませんが、此第二回は餘りに甚うございます、忍月君再び讀んで見たまへよ。
兎に角一夜づくりならばなか〳〵の傑作、精一杯の作ならばまた非常の缺作。

○新著百種の色懺悔（小本一冊百二頁定價金十二錢　東京神田區南乘物町吉岡發行）

本書は紅葉山人の著、近頃めづらしき傑作でも、併し評判程ではありません、到底美妙齋の蝴蝶や、春の舍の細君など、駢べらるゝものではありません。其の結構および文章につきては已に國民の友にも女學雜誌にも細評がありましたから、今更茲に事新らしく申しますまい。が、其文章は唯目前の變つて居る文で、一口にいへば乳兒の空言、

Babble 推察せねば解らんといふことは、鳥渡惡まれ口ながらもいはねばなりません。而て又誰も未だいはないが、眩ゆき程に澤山ある、……と――の用ひ方の間違つて居ること、是も本書の大瑕疵でしやう

○學校家庭遊戯全書（定價金一圓仙郷學人霞城山人太華山人共譯　東京神田區錦町一丁目少年園出版部發行）

吾人は今まで完全なる遊戯書のなきを非常な遺憾に思ふてをりましたが、此學校家庭遊戯全書に接して、其感情はいつしか落花と與に散り失せました。本書は彼の有名なる獨逸ワクチル氏の新遊戯書を、仙郷、霞城、太華の三氏が輕妙の文章を以て譯されたもので、走戯、跳戯、騰戯、球戯を始めとし、丸戯、拋戯、体操戯、遊泳戯、棋戯、影戯、風戯、水戯、重學戯、理學戯、滑稽戯、妖術戯等の部門を別ち、都合二百八十種の遊戯を蒐めたものです。苟も世の文明の母たる方々にして其愛兒の嬉々たる擧動、啞々たる笑聲を見んとならば、又其身体の健康、氣象の活潑を養はんとならば、本書を座右に缺いてはなりません

○國のもとゐ第一號第二號　日本橋區馬喰町二丁目一番地興文社發行

雜錄

○日本文學　第九號

麹町區飯田町五丁目八番地日本文學發行所

○自笑粹誌　第一號

日本橋區濱町三丁目一番地歡奇社發行

評判の極めて大ふして、其實の極めて少なものは、實に國の基でも、吾人は謹んで其第一號二號を拝見しましたが、一つの感心する記事に出遭ひません。　人は文明之母と姉たり難く妹たりがたし者は實母國の基だといはきましたが、吾人は此樣な雜誌と文明之母と駢び稱せらるゝと、極めて殘念に思ふのです、國の基御自身も必らず左樣でもありましやうが。○日本文學は本邦文學の發達を謀るを目的とし、博士學士等の論說講話を蒐めたもの、實に本邦文學を修むる者には欲くべからざるの寶です。第九號などは如き、上田萬年氏の言語研究法を除きては殆んど金玉の集合、但し雜報のかき方はモ少し御注意を願ひたいものです。○自笑粹誌は其發行の趣旨で見ると、温柔郷裏の妙味を悟り、紅裙社會のアラを知らんとするらは、須らく自笑粹誌を一讀をべしとあります。而て見ると批評するにも及ばんものでせう。○政事論評は北豐島郡金杉村二百七十七番地より、代議政友は神田區花田町六番地政鈴社より何れも發行になりました。

○寶物取調に就きての所見　　川田剛

余は、全國寶物取調委員長九鬼氏以下一行十餘人と共に、去夏より今年二月まで二百餘日の間、京都、大坂、奈良、滋賀二府三縣を巡廻し、今年一月下旬までに、四萬七千二百五十四個の寶物を撿閲せしが、其の内優等と見認し者、一千三百八十六個、次等と見認めしもの、四千百七十九個、其の所有者は、神社、佛寺、人民の三種にして、就中、佛寺の所有、最も多し。其の品目は、毎度官報に記載したれば、諸君も御一覧ありしならん。

今度、我輩が出張したるを世評にては、專美術工藝品のみを取り調ぶるやうに申し傳ふとも、美術工藝のみには非ず、舊記古文書、其の外の物品にて、制度、風俗を考へ、歷史に參照に充つべきものも、寶物と云ふ文字の内に籠れり。設令へば爰に古田券あらんに、反古同様のものなれども、それにて昔の地價も分り、署名に華押を用ゐ、印形を用ゐざりし等、古今の制をも知り得べし。爰に古馬鐙あらんに、制作は粗惡なれども、それにて何の時代には壷形を用ゐ、何の時代には輪形を用ゐしことを知り得べし。かやうなる譯にて、寶物には種々の物品打ち交りたり。

さらば、これを取調べて、如何なる利益あるかと云ふに、國家の公益に就きては、第一に、希世の重寶を保存し、其の散逸を防ぐ事、第二に、制度を考へ、歷史の參照に充つる事、

第三に、美術工藝の模範として、現今製造家の粗惡を誡むる事、第四に、世界萬國に比類稀なる、古建築、古寶器を圖寫、又說明し、之を海外に傳へ、我が日本帝國の光運を發する事など、此の外さまぐの利益あるべし。

又、我々自身一己の利益に付て申せバ、古語に所謂、百聞不及一見にて、是まで、書物や圖畫や傳聞にて、考へ置たつる事ども、實際、其の物を見て、舊案を變じ發明せし類頗多かりしなり。余ハ素より美術學者に非ず、鑑定家にも非ず、されど、舊記古文書を取調べ、又議長副議長の地に立ち、專門美術家、鑑定家の會議を開き、之を裁取せしまでにて、自分の眼識ハ、甚、未熟なれバ、今日の演說も、專、美術の深旨を論ずるにハ非ず、自分一己の所見を述べて、當否を聽衆に問ハんと欲するのみ。

さて、舊幕時代にハ、巡見使とか申して、五七年目に役人を派遣し、神社佛寺の寶物を改めし事あり其役人ハ、美術家でも鑑定家でもなく、役目一と通りにて出張せる故、其の改めを受くるものも、殘らず寶物を出すも無益の手數が掛るとて、一社一寺に付きて、各四五品八九品づゝ、目錄に相添へ陳列するまでにて、其の品ハ善惡眞僞打交り、中にハ傳來正しき重寶も有りつれど、いつの頃か僞物にすり替へられ、其の名目と箱ばかり立派なる類も多く、却つて目錄外に名品數多くある處もあり。畢竟巡撿使目錄ハ、何の用にも

立つまじと思はるゝなり。

寛政年中に、白川少將松平定信、樂器、兵器、書畫等を圖寫し、集古十種と名づけ、之を刻行せしが、少將は學識もあり、鑑定の眼もある人なれば、其の品は精選なるべきに、今これを實物に就きて視るときは、聊、心得がたきものなきにしもあらず。試に一二を擧げていはゞ、其の古畫肖像の部に、大和弘仁寺所藏の小野篁の像を寫したるに由つて、今其の原品を視るに、いかさま、五六百年を經たる古畫には相違なけれども、さしたる妙筆には非ず、夫よりも、同寺所藏にて、寸法表装も大略同樣なる弘法大師の像は年代も古く、筆もまさりて見ゆるに、此れを捨てゝ、彼れを取られしは、如何にぞや。又兵器旌旗の部に、攝津四天王寺所藏、源平諸大將の旗を寫されたるに、今其の原品を見て、いよ〳〵疑惑を增せり。四天王寺は上宮太子の御建立、佛法最初の古刹といへども、しば〳〵火災に罹り、今の諸堂は近世の造營にて、現在の寶物に、太子時代のものは甚少し。墨蹟類に至りては、後人の摸造多く、空海、菅公、道風の筆は申を迄もなく、漢土の東坡、山谷、韓退之、白樂天、陶淵明、關羽より以上、老子、莊子、顏淵、子路等の書幅等あり、隨分馬鹿げて見ゆるなり。而の諸大將の旗は、夫等よりはよけれど、眞物なりとは保證は致し難し。新井白石が軍器考に、石清水八幡宮なる源義家朝臣の旗、上野國新田氏なる同朝臣の旗、大和和田村の氏

家なる乳付の旗などをば取りされど、此の諸大將の旗は取らず。白石は四天王寺の寶物をば見ざりしかといふに、さには非ず、見し證據には同寺所藏の七星劍、太子の鳴鏑など悉、之を圖寫せり。されば白石は彼の旗を僞物と思ひしか、但、また白石時代には此の旗はなかりしを、其の後に僞造せしか、いかにも合點行かぬ事なり。少將などの人が、何故之を見誤りしぞといふに、當時十万石をも領せる大名、殊に大將軍家の近親たる貴顯の身分にて旅行するには、弓矢、槍、長刀、具足、引馬、從者百餘人も引具して出たる風儀故、自身親ら社寺に往きて、寶物を見る事はでき兼ぬるわざなれば、餘儀なく人手任せにし、其の圖を取寄せて見られしなるべし。さてこそ集古十種の凡例にも、凡所謂之模本、有正圖、有縮圖、今一仍模本而收入之とは記るされたれ。總体器物にもせよ、書畫にもせよ、眞品と圖畫とは一層の隔あり、寶物を見ざれば、善惡眞僞は見分け難し、少將の誤りしも亦宜ならずや。又同時代に、皇居御造營あり賢聖障子の故實等取調參考の爲、幕府の儒官柴野彥輔與右筆屋代弘賢、繪師住吉內記、命を受けて、京都、奈良邊に出張せしが、此の人々は、學問書畫の專門家なり、且　白川少將ほどの貴人にてもなく、自身に各社寺を巡廻しつれば、殘る所なく撿閱せしかと思ふにさには非ず、當時は今日と違ひ、道路は開けず滊船、滊車、人力車の便もなく、駕籠にのりてゆる〳〵と行く故、東海道の往返に三十日近く日を費し、

其の外も之に準じて知らるゝなり屋代が日記、道の幸と云へる書を見るに、九月中旬江戸を發足し、十二月末に歸るとあれば、百餘日の旅行なれど、往返を除き、其の寶物を見し日數は、六十日ばかりなるべし其の寺社寶物展閲目錄三冊にしるせる品、二千點には足らず誠に大略なる取調と見えて、大和にて西大寺東大寺の古文書、尊勝院の天平經六百巻、法隆寺の玉虫扇子、秋篠寺の技藝天女木像、藥師寺の吉祥天画像、寶生寺の觀音十二神將木像等は目錄に見えず、京都も同樣のありさまにて、今度我々が撿閲に較ぶれば、場所の數も、物品の數も、十分の一には及ばざりしなり。余は白川少將、柴野栗山の學識なく、屋代、住吉の眼識はなけれど、實見せし物品の數は、彼等に十倍せり前にも申しゝ如く、百聞は一見に及ばずの意味あれば、今日演説せる事も、千慮の一得なしとは限らず、其の心して聽聞あらんことを乞ふ。

そも〳〵何事によらず、傳聞と實際とは、相違するものなり昔、織田右府、僧徒を惛み、叡山其の外諸寺を燒拂はれしは、歷史に見えて、衆人の知る所なり夫れに付き江州地方には古刹なし、寶物も其の時燒失せりと申し傳ふれども、今度實地に臨み見るに、いふにも、延暦寺、園城寺、西教寺等、いづれも、豊臣、德川治世以後の再建にて、湖東湖北の古刹には廣大なる境内に、礎石のみ殘りて、僅に一二粗造なる堂舍を存する處多けれども、佛像、器

具まで悉皆烏有となりしには非ず彼の延暦寺、傳教大師の筆跡、八舌の鎖鑰、古蒔画の經函、園城寺、智證大師の不動畵像、同大師將來の經巻、來迎寺の十界圖、羅漢畵像石山寺縁起、繪巻物等、好事家の熟知せるものは申すに及ばず、木下渡岸寺なる釋迦大日の木像、百濟寺なる十一面觀音木像、西明寺なる三層塔、並に其の壁畵など、皆七八百年乃至、千年以上の古作、此の類其の外にも數多あり又彫刻は奈良、繪画は京都といふは通論なれども、廣隆寺東寺の佛像は奈良に劣らず、法隆寺の壁畵、當麻寺の曼陀羅等、京都にも比類少し。大坂府下には古寶なしと斷定する人もあれど、河内觀音寺なる如音輪觀音木像、道明寺なる十一面觀音木像、叡福寺なる太子繪傳の雙幅、攝津四天王寺なる法華經、扇面の画等貴重なるもの枚擧すべからず。兎角何事も傳聞と實見とは相違あるものなり、今實見にて思ひ當りたる一二條を述べんとす。

從前學者の說には、我が國上古の風俗は左衽なり、古木像、土偶人に左衽あり、又續日本紀第八巻元正天皇紀に、

養老三年二月、壬戌、初令二天下百姓右一襟。

とあるにても知るべしといへり余も之を至極尤なりと思ひ居しに、今度數多の木像塑像を見たるに、さま〴〵れ體ありて一樣ならず。且、此れ等の像には八九百年以上のも

のと見ゆるが多しさすれば、上古質朴の世には、着服の制度なく、其の袵を右にもし、又左にもし、銘々隨意なりしを、養老三年に至り、始めて左袵を禁じ、右袵と定められしにて其の以前は、日本人民、悉、左袵なりしには非ず。現今琉球の邊土にて、婦人子供の左袵右襟打交りてゐしを見たる人あり、又他の島國、未開の地にも、さる風俗ありと聞けり。之を近世の事に譬ふれば、明治九年三月、太政官の布達にて、佩刀を禁ぜられしが如し、此の佩刀を禁制以前にも、武家を除く外、百姓町人などは、禮服着用、又は旅行の時にこそ一刀を帶したれ、平生は之を用ゐざりしなり。若今より數十年後の學者が、明治九年の官令を讀み、昔時日本の風俗は、士農工商、盡、刀劍を佩びたりと思はゞ、大なる誤なるべし。瑣々たる事なれども、書物と實物とを對考せざれば、やかうの誤をも免れがたし。

（未完）

○コルセツトの來歴

翁湖漁史

婦女子が容儀を修め身を飾る爲めには、古より種々馬鹿なることを爲せるものなるが、中にも最も感心せざるは、西洋婦人のコルセツトにて腰を緊束し、蜂の如く細くすること、支那婦人が足を小さくして、無用の塊となせるとの二つなり。いづれも兄たり難く弟あり難き愚の極にして、天賦の身体を損ひ、わざ〳〵健康の身を虚弱にするとは、實









に呆れ返るも餘りあるの事といふべし

茲にコルセツトの來歴を述べんに、其の根原は何時の世に始まりしや詳ならざれども、三千年前の埃及に既に行はれしと見え、埃及婦人の画像を見れば明かにコルセツトを用ゐたることを知るに足る。グリークの時にも亦行はれて、ホーメルの詩中にも其の事の記しあるものあり。降つて十二世紀頃には佛英の兩國に盛んに行はれ、婦人の美を増すに欠くべからざるものとなれり。其の最も流行せしは十六世紀にありて、佛にはカザリン女王、英にはエリサベス女王が支配せし頃なり。其の頃美人と稱せらるゝ婦女の腰は、兩手の指を擴げて之をとりまくことを得たりと云ふ。斯くの如く想像も及ばざる程の細腰となさんには、日夜強きコルセツトにて腰を緊束するなり。又男子の中にもコルセツトを用ゐたるもありしとぞ、カザリンの子ヘンリー三世の常に之を用ゐたることは世人の既に知る所なるべし。それより十八世紀の末迄は、かゝる極度の弊風を見ることなかりしが、一千八百十年頃より再び古へに復して、其の弊一層烈しくなりて。當時の文章家ブツカンの言に、母が娘を床に倒し、足にて確と娘の背を踏み押へて、其のコルセツトを緊むる時、數條の紐を断ち切ることは珍らしからぬ事なりとあり。又以て其の頃の有様を見るに足る。今日はコラリン、コルセツトとて、比較的に健康に

害少きにコルセットの發明ありて、大に行はるゝに至りたれど、かゝる有害無益の粧飾はせぬころ遥かによろし。婦女子が容儀を修め身を飾るに、敢て不可なけれども、否斯くあらねばならぬとあれども、身体の健康を害してまでもせねばならぬといふとは誤れるの太甚しきものなり。愛孃諸子、少しく之に心あれや少しく之に心あれや。

○コルセットに就きて

鈍迺風流士記

此頃頻りにコルセットの害をいふ者あり、蓋し洋装の行はるゝこと盛んになりし故なるべし。されど何如なる畏ろしき害をもてるものなるや、世人は恐らくは深く知らざるならむ。抑々物の一利一害は數の免かる能はざる所なれども、コルセットには何如なる利あるやを知らで、其害といふものも、固より誰にても之を用ゆる者は蒙るといふには非ずして、唯に多くの人には云々の害を與へ、衛生上云々の不利を來すといふとなり」。

コルセットは元と生理學上、衛生學上の理に適して出來たる服装に非ずして、寧ろ修飾の外見より來りし者といふべく、また決して模範とすべからざる宮樣よりして、流行を致したるものといふべし。故を以て、其害を纖々たる婦人に及ぼせしは欺くべからざるなり。今茲に西洋諸學士の實見を列叙せんに、コルセットは先づ胸膈の下部よりし

て、上腹部を壓迫するものなり。胸膈の下部は肋骨なり、故に之を壓して肋骨間神經痛を起し、其疼痛は甚だし。之に次で甚だしき變化を來す者は肝臟なり、即ち肝臟は緊く束ねられて、其表面は深溝を生じ、甚だしきは其一部全く絞め切られて瓣狀をなし、或は全く相分離することあり、之を絞肝といふ。また其全く分離せるを遊走肝といふ。絞肝乃深溝の周圍は被膜撚衝して、實質も亦多少の變化を蒙るなり。また膽石を生ずる原因となり、彼の刺すが如く、斬るが如き膽疝痛を惹き起すなり。其他膽汁の不足欠乏を來し、消化作用を妨害し、便秘を基づくること少なからず。

加之緊束愈々激しきときは、靜脉の反流を妨げ、爲めに欝血充血等を來し、殊に頸靜脉にあつては、頭部の充血を促がし、爲めに結膜眼の充血症を基づけ、或は胸膜を壓し、貧血を來し萎黃病を起し、肺の運動を限制し、其呼吸を局し、爲めに其活量を減却し、酸素欠如を起し、粘膜に蒼紫色を呈し、頭痛、眩暈、昏瞋等を生ずること少しとせず。其他猶ほ子宮輕位及屈曲を起し、月花の障碍、不妊症或は臀部の疼痛を致し、腹壁は弛緩して、所謂懸垂腹を來し、産時難を釀すこと多し。而してまた軀幹の骨、及び筋纖維の造構を弱くすることは欺くべからざる。猶ほ終に臨みいふべきは、彼の遊走腎を來せしこと是なり。而して以上の事實は皆な屍体解剖して證明せるものなり。

殊に緊束を激しくせんため、鯨鬚或は魚骨又は鋼鐵より製するあり、此等の胸當は、其害を醸すこと固より些少に止まらざるなり已に此害あり、西人知らざるに非ず、前陳の如く諸學者は其非を學理に論じ、また近歳佛國の一女史は、女裝の理に乖れるを痛論し、書を其内閣に呈し、男裝と相等しくせんことをいへり我邦人の西裝を模倣するに方りて、此弊害を漫りに用ゐ来らんか。嗚呼コルセツトなくして西裝といふを得ずんば、寧ろ我邦在来の装束を以て勝れるものとなさんのみ

○佳人の爪よりして其性質を判ず

雲通路大夫

漢土の人は巧みに佳人を品評し、其容貌を描寫し、形容し、記載せること、實に第一といふべし。然れども未だ嘗て爪の形よりして、其性質を判断せしことは聞知せざるなり。頃日西人の記する所を觀るに、曰く、稍々長くして且つ狹き爪を有せる婦人は、詩歌小說等を作爲し、技藝に巧みなる思想を有せり、然れども怠惰の性もまた有り。」長くして且つ廣く扁平なる爪を有する者は、天資怜悧にして、健全活潑なる判決心を備へ、精神常に眞率を表す。」幅廣くして短き爪は、憤怒し易く、爭闘を好み、執拗なる婦人に多く、」甚だしく紅色を帶ぶる爪を有する者は、健全、威力、爽快、寛大等の性質を表し、」堅くして脆き爪を

有する者は、殘忍にして殺戮爭鬪を好む惡婦に多く、」「獸爪の如く曲りたる爪は、姦佞にして毒惡の女子に固有の者にして、」「柔かに曲り易く、且つ薄き爪を有する者は、身体精神ともに弱き者に多く、」「甚だ短かく、殆んと肉上に齧み入れる爪は、或は有力と表し愚鈍を顯はせる者なりと

○少年子記者に答ふ

鐵筆將軍

少年子記者は其第七號の批評欄内に於て、「文明之母」と題し、實に左の如くに言はれたり。

文明之母は亦是れ女德養成を目的とせる一雜誌あり。其第六號に（四號の誤か）年少才子の聞え高き鐵筆將軍が著作に係る「越路の花」と云へる小說あり其起首に左の一齣あり。

朝夕に、えなまつ比はおもひねの、夢のなかにさきそめける。

庭の廣さは如何ばかりぞ？　一面に花。彼處には美人の天に咲ふ椿あり、此處には處女の風情ほ、ゑむ李あり、右手は蜂を接吻せる薔薇、左には蝶と握手せる木瓜、前には色を衒へる山吹、後には香を競ふ瑞香、その他其處此處に植做されたる草木は、皆己がまに〱發きたれば、見亘せる花、見返るも花、實に一面に花。

と畫の如き文字あり詩の如き文字あり何ぞ夫れ瑰麗なるや余輩は此種の文字を愛す。然れども余輩は將軍が何故に文句中に「?」なる西洋の質問點を挿入されたるやを怪しむ者なり「?」を挿入したりとて別段文句に面白味も添へず。然りとて日本文中に唐突にも西洋の質問點を挿入したるは、讀者の注意力通覧力を知らず識らず一時阻障するの弱點あり、且つや餘りに競新好奇の嫌ありと云はずや。余輩は寧ろ「?」を除かんことを希望せずんばあらざるなり(圏点ハ原の儘)

少年子記者の非難まづ此の如きなり。何はともあれ、余は同記者の文明之母を能くも精讀せられたるを謝し、次に余が瓦礫の文字までも細かに咀嚼せられたるを有難く思ふ。

而して余が「インタロゲーシヨン、マーク」を文章間に挿入したるを不可なりとせられたるも、誠に無理ならぬ非難と信ずるなり然れども記者よ、余が苦心も少しは推察せられよ、余が「?」を用ゐたるの苦心を推察せられよ、而して競新好奇の念に出るあらざるを推察せられよ余は常に日本俗体の質問詞に二様の區別あるを知る。

a.「貴孃は芝居を觀たのですか」

b.「貴孃は芝居を觀たの」一層簡にすれば「芝居と觀たの」其答辭にも「芝居を觀たの」

而してaの場合に於ては、已にかの字あるを以て、「?」なきも其質問詞なること瞭然な

るべけれども、ｂの場合に於ては然らず、甚しきは問辭も答辭も一樣になるを前に現はしたるが如し故に粗忽に讀み流さるれば、往々他に意味せらるゝとあるなり。（世には少年子記者の如くに細讀し下さるゝ人のみあらねば）是を以て余はａの場合には一切「？」を用ゐざるも、ｂの場合に於ては必ず用ゆることしたれども、創体の常として往々其用ゐ方に錯雜を生じ、用ゐずてよき所に用ゐ、用ゐずばならぬ所に用ゐざることあり。果ては記者の懇々たる說諭を煩はすに至る。然れども自から又其用ゐ方にも慣れ來つて次第に誤謬を減ずべきを信ずるなり、之を疑はゞ第五号よりの附錄に載せたる「刺客」てふ拙著を讀まれよ序ながら記者に質したきことあり、「？」を挿入すれば、何故に讀者の注意力通覽力を知らず識らず一時阻障するは弱點あるか、之れが明教を示されたきこと是れなり。

○批評せらるゝも難いかな。

吾人は虚譽虚贊を受くるを屑しとせざるものなり、苟も至當のことなりせば、如何な辨難攻擊せらるゝも、却つて之を受くるを好むものなり。頃日改進新聞記者は、我が文明之母を批評して「………第五号より大に記事體裁を改め優美の風を增したり」云々と

いはれたり。吾人は成程表紙の体裁だけは第五号より改めたるに相違なきなり、（從来の版の磨滅したるを以て）然れども記事の体裁は毫も改めたるの覺えなきなり、（改むるの必要を見ざるを以て）隨つて折角お譽め下されたる批評も、サツパリ有難く感ぜざるなり、否むしろ虚譽虚賛として擯斥せざるを得ざるなり。成程批評なるも難し、批評せらるゝも難しといふが、眞に然り。而して此の爪の先ばかりの小事を、吾人が大人氣なくも爰に喋々する所以のものは何ぞや、蓋し此頃一種の弊風批評者社會に流行し、能く〳〵中の價値をも吟味せずして、徒らに褒貶の沙汰を下すものあればなり。殊更いふまでもなけれども、見ざるなら評せぬぞよき、又評ぜざれば叶はぬならば、國民之友記者の如く「文明之母第五號は、大に躰裁を優美にしたり、從つて其心術も益々優美になりたらん」（國民之友四十七號）などとのごとくはいふぞよき

○おかると團十郎

市川團十郎は、忠臣藏の茶屋場のおかるの役に扮することを辭みたり、時事新報と女學雜誌の兩記者は、大に其見識の高きに敬服したり、其眼孔の大なるに感服したり。吾人は怪しむ、團十郎は何が故におかるに扮するを辭したるか、又兩記者は何が故にこれに

敬服感服したるうと。嗚呼演劇場裏——善も惡も、貴も賤も、高尚も鄙俚も、與に一團となりつゝある演劇場裏に於て、彼女ハ賤しきが故に我れ之ニ扮せず、彼ハ不善なるが故に我れ之ニ扮せずといはゞ、到底演劇ハ成立つまじきものなり。是れ實ニ解りきッたる話、豈又焉んぞ極美の美術なるものハ、果して不德と伴ふを得るか得ざるかを論究するに足らんや。局外生が「團十郎ハ一俳優のみ、此の如き生意氣の言を吐く深く咎むるニ足らず、吾人は唯其見識の高きを示さんと欲して、却つて見識の卑さを示したるを不憫ニ思ふのみ」といはれしハ、知言なり、否普通の言、三尺五寸の童子も斯くいふなるべし。然れども團十郎よ、モ少し眼を大きくせよ、汝が卑しみしおかるにも、却つて笑はるゝぞ。兩記者よ、俳優などの痴愚を學ぶなよ、尚ほ一層顔面を赤くせざるを得ざるニ立ち至るべきぞ。然れども再び思へバ、團十郎の如きものもあり、兩記者の如き者もあるニあらざれバ、社會の活演劇も面白味あらざるべし、古人曰く何とかも道具なりと、眞に然り。

○婦人慈善會への忠告

讀賣新聞記者ハ、昨月十六日の紙上に於て、婦人慈善會に對し、三箇條の忠告を爲したり。乃ち左の如し。

(一)慈善會の名を改めざるべからず、世間豈慈善を行ふに當つて、自ら稱して慈善者なりと呼ぶ者あらんや、慈善會の名義は自ら稱して慈善者といふにあらずや(二)慈善會を開くに必要なる時を撰まざるべからず、抑も婦人慈善會の起源たるや、英國にて自由貿易論の起りたる時、同主義を執る人の夫人令孃達が、自由貿易論擴張の費を助けん爲め、斯る會を起したるにあり。今我國の慈善會を見るに、事無きに之を開くもの、如し。然らば則ち奇を好み、名を求むるの誹を免れざるべし。今日決して養育院に寄附せざるべからざるの必要はあらざるなり、若し寄附せざるべからざるの必要あらば、須らく醵金して寄附せらるべし、態々慈善會を開くにも及ばざるべし。(三)慈善會を開くには、誰人も最も入り易き所に於てすべし、決して玩弄虚飾品にして、日用有益にあらざるものを賣る勿れ。又た自ら貴婦人の威嚴を棄て、彼の買主をして腰を屈せしむるの不体裁なからしむるを要す。

如何にも御尤もなる忠告といふべし。然れども吾人は尚ほ別に一の忠告あり。それは讀賣新聞記者の第三の忠告と少しく扞格するが如くなれども、決して然るものにあらざるなり。 曰く、貴婦人の威嚴は固より之を棄つべし、買主をして腰を屈せざらしむべし、然れども又其威嚴を失ひ過ぎて、茶屋場におけるの如くなるべからず、而して一般の買主をして、之に對する團十郎の如くならしむべからず。

彙報

○高等女學校行啓

皇后陛下には、兼て仰せ出されたる如く、去月十二日午前九時御出門にて、一ッ橋外なる高等女學校へ行啓あらせられ、生徒の學業手藝等を御覽の上、隣地なる共立女子職業學校へも行啓ありて、生徒の課業及び生徒の製作品陳列場等を御巡覽ありて、午後四時過ぎに還啓あらせられたり。其節高等女學校、並に共立女子職業學校へ、各々金二百圓づゝを下賜相成りたる趣、毎度ながら　陛下の深く女子教育の爲に大御心を勞せられたまふは、誠にありがたき事にこそ。

○華族女學校行啓

皇后陛下には、同く十八日午前九時御出門、華族女學校へ行啓あらせられ、親しく教授の摸樣を御覽ありて、生徒一同へ「美かきのしたくさ」一部、並に折入御菓子を下賜あらせられ、午後三時還御遊ばされたり。當日は常宮殿下にも同校に御成ありて、皇后陛下へ御對顔あらせられたる由に承る。

○青山御所の御養蠶　青山御所にては、例年の通り御養蠶遊ばさる、由にて、群馬縣下より、同事業に錬達せる者十數名を召上られて指南となし、　皇太后陛下にも御手自から勞を取らせられ、女官の方々も一層勉勵して從事せらるゝ由、尚ほ聞く處に依れば、本年は右の繭絲を以て、羽二重に織立てたまはんとて、又群馬縣下より機女數十名を同じく召上げあそばさる、ぞいふ。誠に有難き御事にこそ。謹告も、世間朱門の各貴婦人方よ、願くは此の有難き　聖意を奉躰して、少しく織手を勞することを勉められよ。

○一夫一婦の歎白　婦人矯風會東京南部の發起にて、其筋へ一夫一婦の歎白、を爲さんとて、昨今頻りに同意者の調印を取り居る由、其趣旨とする處を聞くに、曰く

歐州各國（伊太利を除き）女子の男子に超過するは、僅に百分三、七に過ぎず、拾七歳以上四十五歳以下の男女は、兩々相平均す。我邦にては去る十九年の調査に據れば、男子の數は一千九百四十五万千四百九十一人、女子の數は一千九百〇五万五千六百八十六人にして、男子百人に付女子九十七人餘を出さるに、一人の男子にして數人の女子に接するは、天理に背き人情に戻る者なりとて、其弊害六條を擧げ、最後に刑法第二百五十條、有夫の女、に通したる者は、五月以上二年以下の重禁錮に處す、其相姦する者又相同じ。とあるは、有妻の男子、若くは有夫の女、他の男子に姦通したる者は、共に六月以上二年以下の

重禁錮に處す、其相姦する者亦相同じ。と改正し、又民 法若くは婚姻法の如きものに於ては、左の箇條を設けんことを希望すと云々。

姦通とは有妻の男子、若くは有夫の女、他の男女に接し、又は有妻無妻を問はず、有夫無婦を問はず、他の有妻男子、又は有夫の女に接するを云ふ。即ち有妻の男子が妾を置き婢に接し、藝娼妓に接するが如きは、皆な姦通なりとす。「夫婦の中、何れなりとも姦通する時に於ては、其配偶は之を裁判所に告訴するを得べし、而して姦通者に向つて相當の償金を請求するを得べし、然れども其償金は姦通者の所有財産の二分の一を超ふべからず。「姦通は離婚を請求する正當の理由と爲すことを得べし。

○慈善音樂會　東京盲啞學校が維持費を補ぬが爲め、貴夫人方が委員となりて、去八日午後八時より、一ッ橋外東京高等女學校の講堂に開きし慈善音樂會は、開會前より車馬の門内に入るや否、場内は貴女紳士を以て充ち滿ち、外國人も多く來會せり。場の正面には草花にてMEGUMI.なる文字を造り出し、其他美麗なる装飾あり、演奏曲目は總て十五番ありて、過半此等の技に熟達せる外人の演奏なりければ、喝采の音は常に絶えざりし。殊に高等音學校教師ジツトリヒ氏のヴァイオリンは、其絶妙なるといはん方なく、演奏し了つて、モ一度と所望せられきしと、當日無上の榮譽と見受けられぬ。遂に盲啞學校生徒箏曲ありしが、是れが當日の聞きものと待構へられたるほどありて、實に當日の聞きものなりき。其後啞生に謝辭もありたりしが、是亦發音自在にして感服の外なかりき。

○ローヤル、マリヲネッツ　去八日午後九時より、横濱居留地パブリック、ホールにて催せし、ローヤル、マリヲ子ッツを一見したるに、毎度ながら西洋の興行物は感服の外なく先づ場面装飾の華美光彩燦然たる、云へば更へ、同夜はアヤツリの仕掛にて、舞踏、足藝、道化等數番の人形處作事ありしが、中に忽然として一体の白骨中天より現はれ出で、洋々たるピヤノの演奏につれて、右に廻り左に跳ね、頻りに舞踏しある中に、忽ち頭骨天に飛び、四肢地に離れ墮ちたるが、又各崛起しつ、舞ふと見れば、復合ー、合ひつ離れつ、離れつ合ひつ、曲折れど、舞亂れど、遂に忽然中天にかき消えたるは、快絶妙絶、喝采は聲靂時止まざりき斯くて後尚道化茶番、唱歌等數番あり、最後に幻燈を以て活人畫様のいと壯麗なる古宮殿の摸様を現し、いと華々敷打出しにて、十一時に閉場したりき。（毎日新聞五月十日紙上）

廣告

諸君御待無ノ最良書出現セリ

東京專門學校
明治法律學校
警官練習所
講師 日本 佛國 法律學士 大審院撿事 法律取調委員

從五位磯部四郎先生講義
門人部澤敬二郎君筆記

憲法講義

全一冊

洋綴總クロース
金文字入美製本
紙數六百頁
實價金九十錢
郵税金三拾六錢

附議院法。衆議院法議員選擧法。會計法及貴族院令講義
皇室典範。皇族列次及衆議院議員選擧法 附錄

右ハ實力ト經驗トヲ以テ法律社會ニ名聲赫々タル磯部四郎先生ノ講義セラレタルモノニシテ解譯ノ確實正當ナル文章ノ平易流暢ナル遠ク他書ノ及バサル所ナリ當時憲法ノ註釋或ハ正解等ノ名ヲ以テ梓ニ上ルモノ其數幾十種ナルヲ知ラズ然レ𪜈投機者ノ一夜作ニナリタルモノニシテ實ニ見ルニ忍ヒザルモノ多ク只徒ラニ文章上ニノミ拘泥シテ毫モ深意ノ存スル所ニ着目セズ亦國家ノ基本タル大憲法ヲ謬ラシム此書ヤ前書ノ比ニアラズ憲法ノ正條ヨリ議院法衆議院議員法選擧法會計法及貴族院令ノ各條ニ付確實正當ナル解釋ヲ下シ且ツ重大ノ問題ニ關シテハ一々各國憲法ヲ參照セシモノナリ此書ヲ繙キテ初テ憲法ノ深意ノアル所ヲ知ルヲ得ベシ殊ニ帝國議會ハ最モ主要ノ問題タル會計法ノ如キハ却テ他書ノ忽ニセシ者ナリト雖モ此書ハ務メテ綿密ニ解釋ヲ下セシモノナリ此書ヲ繙クモノ宜シク注意シテ此廣告ノ誣言ニ非ルヲ知リ賜ハンヿヲ希望ス

クスホルド」大學ニ在ルノ日之ガ起草ニ着手シ爾來沸都ヨリ米國ニ官遊六星霜ノ間常ニ坐右ヲ離サス屢飜閲メ語格ノ異同ヲ考ヘ誤謬ヲ訂シ歸朝ノ後尚學友高等商業學校長天野二郎君中學校長丸山淑人君ニ計リ删補シテ初メテ世ニ公ニセラレシモノナレバ語格ノ正確ナル文詞ノ雅馴ナル遠ク他書ノ及バザル所ナリ英語作文等ヲ學ハント欲スルモノ此書ヲ繙カバ大ニ益スル所アルベシ

英國農學博士ヘンリータン子ル氏原著
日本蘆葉六郎先生譯述
日本農學士農藝化學士酒匂常明先生校閲

農學楷梯

全一冊

紙質上等 實價三拾六錢
紙員二百頁 郵税拾二錢

學說ト實驗ト相須チテ働ヲ爲スヘキハ何事ニ限ラス肝要ノ事ナルガ我國ノ農業ハ昔時ヨリ拓ケタレトモ兎角學說ト實驗ト一致ノ働キヲ爲サズ只父祖傳來ノ舊慣ヲ墨守スルニヨリ爾來進歩極メテ遲緩ナリ泰西ハ此ニ反シ學理ノ應用ヲ爲ナシ駸進セシニヨリ僅々數十年ノ間ニ其進歩ノ懸隔實ニ著シキヲ見ル所以ナリ故ニ今日ノ識者ハ日本ノ農業ヲ擴張スルニハ農學ノ改良普及ヲ以テ第一ノ急務ドセリ本書ハ原名ヲフォーストプリンシプルス、オフ、アグリカルチユールト題シ英國農業博士ヘンリーター子ル氏ノ著ニ係リ小學生徒ニ供フルモノナレバ務メテ日常卑近ノ語ヲ以テ懇ロニ說明ヲ加ヒ初學ノ徒ニ解シ易カラシム其所說全ク農學ノ初歩ニ止マルト雖モ理論實用共ニ先人未發ノ新說アルヲ以テ大ニ世上ノ好評ヲ博シ遍ク各國ニ傳播セリ先年蘆葉先生歐米漫遊ノ際英京倫敦ニテ之ヲ購ヒ今叫譯シテ農學楷梯ト名ク蓋シ農業ノ原理ト實用ヲ論シタルハ此書ヲ措イテ他ニ優ルモノナシ苟モ農業改良ヲ希望スル諸君ハ此書ニ就テ講習セバ裨益スル所大ナルベシ且ツ印刷ノ鮮明ニシテ製本ノ美麗ニ加フルニ代價ノ低廉ナルハ從來弊舗ノ世ニ誇ル所ナリ希フ江湖ノ諸彥幸ニ御愛讀アランヿヲ

埼玉縣鴻巣町 長嶋本店
東京大傳馬町 長嶋分店

出版廣告

仙郷學人霞城山人太華山人共譯

學校家庭遊戯全書 全

定價金壹圓
最上等クロース金字
製美本無逓送料

右は豫て廣告致し置きたる如く今般刻成出版致し候抑も本書は獨逸ワク子ル氏の新遊戯書を飜譯したる者にて走戯、跳戯、蹴戯、毬戯、丸戯、拋戯、體操戯、游泳戯、棋戯、影戯、風戯、水戯、重學戯、理學戯、滑稽戯、妖術戯等の部門を分ち、二百八十種の遊戯を撰み、畫圖を挿むこと一百二十、實に本邦未曾有の遊戯書なり、されば中小學校の參考書として一日も缺く可らざるは勿論家庭の重寶として育兒に心を用ひ給ふ世の父母がた若し此書に據りて各種の新遊戯を與へられなば花の朝、月の夕、夏の日と、冬の夜とを問はず愛兒の啞々の笑聲を買ふへく、烱々の眼光を見るへく、以て感情の美を養ひ以て智識の真を養ひ、又身體の健全氣象の活潑を養ふへく、殊に少年諸子が目下各處運動會に遊戯會に之れを携え去りなば新遊戯の材料は殆んど無盡藏と一般にて、快樂の泉源は蓋し汲み盡し難からん、又此書は金字クロース製の美本なれば諸學校の賞品として生徒に與ふるに適し又手土産贈物として小兒に與へなば他の品を贈るに優ることゝし幸に一本を購ひ給はんことを、謹白、

東京神田區錦町一丁目十三番地
少年園出版部

大賣捌所

東京京橋區三十間堀町　良明堂
同　博文堂
神田區佐柄木町　東海堂
同裏神保町　敬業社
同南乗物町　吉岡書籍店

地方賣捌所

京都三條寺町西入　杉本甚助
大坂東區備後町　石井鉤三郎

東洋學會誌雜

四月二十八日發行

第三編第四號目錄

發兌　定日　每月一回廿八日　定價一冊金八錢六冊前金四十五錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓六十三錢　府外郵稅一冊ニ付金二錢ツヽ

廣告料　本誌ハ五號活字二十五字詰一行金八錢廿行以上金七錢一段（廿八行）以上一行金六錢トス但シ前金郵券一割增ノ事

御注意　御注文之節ハ○國郡、府、區、町、村、番地、姓名等詳細御申込ヲ要ス○御轉居ノ節ハ新舊所御報知ヲ乞フ

○本誌ハ前金ニアラザレバ遞送セズ○見本ハ郵券拾錢ニテ呈スベシ○代價ハ郵便爲換、ト爲換、銀行爲換、又ハ通運便ニテモ御送リアリタシ○郵便爲換ナレバ芝口郵便局へ御振リ込ミアルヘシ○郵便切手ヲ以テ代金ニ換用セラルヽトキハ一割增シナリ●前金相切レナハ直ニ遞送ヲ止ムヘシ

東京京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地
發行所　東洋學會

博聞雜誌卅七號目錄

學術隨筆

●論說○動物睡眠ノ源因　井上斧作○再ビ無黄道士ノ說ヲ讀ム　橘良平○尸乗ヲ創置セズンバアル可ラザルノ論（寄書）竹内嶰谷●歴史○安徳天皇ノ行衛ノ異說（第四）○同（第五）○能登守教經ノ沒落○大政歸朝ノ原因●傳記○偽聖マホメット、アクメットノ傳○代言人元田肇氏ノ傳●天文○太陽ノ斑點○地動ヲ驗スル簡易法○東京西京地震ノ比較●地理○綏靖天皇ノ御陵發見○滋賀ノ離宮○古墳發堀○日本第一ノ高地價○噴火山ト鑛山トノ關係○琉球ノ渡名喜島●人事○全國大地主表○盜人ノ投票○米國大統領ノ握手）不婚會ノ解散○殉死ノ風習○異色ノ奇兒○護謨人○盲目ノ奇童●農事○鷄卵貯蓄法（前號ノ續）●工業○新發明海底潜航船ノ構造（無煙燬響ノ連發銃○新發明ノ小銃○斗量器械ノ運用試驗○全國鐵道ノ増加○全國電線ノ延長●商法○日本釜山間ノ貿易○世界紙幣流通高○東京諸會社數○東京府下質屋貸金高●諸業○パノラマノ創立○挿花ヲ永ク持タスル法○漆器ノ利用●理化○鍼ヲ以テ水ヲ清淨ニスル法○三種ノ煙火製造法●衛生⊙鷄卵ノ滋養分○壓埃肺癆ヲ傳染ス○創傷ヨリ肺病ヲ傳染ス●教育○林學ノ沿革）函館商船學校○日本蠶ノ教授●文籍○後鑑○赤穗義士ノ實錄書編纂○北海道史料ノ募集○英國ノ無休刊新聞●貨物○羽前國立石寺ノ古銅印○御寄附ノ綴錦○鹽ノ效用○天蠶絲●雜事○藁餅ノ製法○魚醬油ノ新發明○漂流人物語（完）●廣告數十件

●毎月五日廿日兩回一冊八錢○半年分十二冊金九十錢八ヶ月分十八冊金一圓卅錢○一年分廿四冊金一圓七十錢○爲替ハ芝口局○郵券代用ハ一錢券ニテ一割増

發行所　東京京橋區弓町十番地　博聞雜誌社

●懸賞和歌募集廣告

●題
○新樹
○和氣清麿
○外國へ行く人をおくる

●賞
○天　金五圓と日本文學一年分
○地　金三圓と日本文學半年分
○人　日本文學半年分

●撰者
○本居豐頴大人
○黒川眞頼大人
○鈴木重嶺大人

●用紙ハ美濃二ツ切の堅詠草（一枚ニ一首づゝ）●長歌短歌とも一題一首に限る●來六月十日〆切●受賞和歌ハ六月廿五日發兌の日本文學第十一号を以て發表すべし●天地人以下の秀吟をも引續きて日本文學へ登載すべし

二十二年四月廿日

東京麹町區飯田町五丁目八番地
日本文學發行所

●追つては懸賞問題をも募集すべし

●日本文學　第九　四月廿五日發兌せり

●本誌ハ本邦文學の發達を謀るを目的とし博士學士の論說講話を掲載せり

●毎月一回●一部定價金七錢（郵税共）○十部前金六拾錢（同上）○廿部前金壹圓拾錢（同上）

●郵券代用苦しからず但壹錢切手に限る●見本ハ郵券六錢にて送附すべし

發兌元　日本文學發行所

大賣捌　敬業社
東京神田區裏神保町一番地

社告

一文明のそゝ主花筆者此程ヨリ助膜炎ニ罹リ一時ハ黄泉ノ客タルベキヲ認定シタル程ナレハ本號發兌ハ意外ニ延引セリ此段愛讀諸君ニ謝罪ス

一文明のそゝ排[illegible]代金相切候節ハ帯封ヲ桃色洋紙ニナスベシ御注意アレ

大賣捌

埼玉縣所澤町　尚文堂
仝浦和町　文華堂
仝熊谷町　近榮堂
仝川越　水村岩三郎
群馬縣高崎　嶼平堂
仝前橋　仝
仙臺國分町　三友社
越中富山　眞田善二郎
仝　大橋甚兵
越後長岡　目黒十郎

仝　松田周平
秋田　本間金之助
神奈川　吉川伊兵衞
名古屋　永樂屋
大坂　松村九兵衞
仝　前川善兵衞
和歌山　平井文助
出雲松江　盛進堂
熊本　長崎二郎
仝千反畑　文明堂

遞信省認可

社告

本誌ハ毎月一回(十五日)ニ發兌す
本誌ハ前金ニあらざれバ送本せず
定價ハ一冊金八錢六冊乃ち半年分四十五錢十二冊乃ち一年分八十四錢
郵税ハ府外に限り一冊ニ付二錢と申受く
見本ハ壹錢切手十枚を送らるれバ呈す
送金ハ郵便爲替ニして東京郵便局へ宛て御振込あれ郵便切手代用ハ壹割増
廣告料ハ一行五号活字廿字詰金十錢十行以上金九錢廿行以上金八錢卅行以上金六錢

發行兼編輯人　東京深川區諸町十三番地　中村一
印刷人　東京深川區富岡門前仲町八番地　小西石造
發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地　生文社
發賣所　長島分店　文昌堂　仝所

特別大賣捌
東京本郷區元冨士町　盛春堂
仝京橋區三十間堀一丁目　良明堂出張店
仝神田區佐柄木町　東海堂
埼玉縣鴻巣町　長嶋本店

明治二十二年五月十五日印刷出版